

軍港開設と舞鶴の寺社の動向について

多岡 佳祐

はじめに

本稿は、舞鶴における軍港開設の影響を、寺社の動向に焦点を当てて検討するものである。

近年、軍事史研究の中で、軍隊と地域社会という視点での研究が進んできている。軍隊が地域社会に与える作用と反作用とを焦点としており、そのため様々な素材や視点でのアプローチが可能となっている。ただし、未だ軍港都市の先行研究は少なく、特にその研究の中心となるものは各軍港所在地の自治体史である¹。

さて、日本海軍の軍港所在地はかつて寒村であり、軍港開設という近代の国家的要請で都市へと変貌した。それによる様々な変化については、例えば舞鶴(図1)の経済変容に着目した坂根嘉弘氏の研究²や、近代以降の舞鶴の人口に着目した山神達也氏の研究³などに詳しい。

そして、その影響は信仰面にも大きく及んだ。後ほど詳述するが、例えば軍港開設によって生まれた都市である新舞鶴町⁴の中心地である浜には表1の通り、従来は臨濟宗寺院1ヶ寺しか存在しなかった。ところが、軍港開設以降の教会所の増加や移転などにより、表2を確認すると現在では浄土宗、真宗、日蓮宗など7ヶ寺が存在する。新舞鶴町域全体では、臨濟宗寺院2ヶ寺と諸宗派の寺院を合わせて11ヶ寺まで増加している。神社に関しても、従来の浜では近隣の森にある彌加宜神社(図2⑱、写真1)を氏神としていたが、大正時代に村内の3社を合祀して創建した白糸浜神社(図2⑳、写真2)を新舞鶴町の氏神とするなど、やはり大きな変化が起こった。

このような影響の大きさにも関わらず、先行研究の中でこの点についてはほとんど触れられてこなかった。各地の寺史や郷土史研究の中で触れられることはある⁵が、その範囲については非常に限定的である。しかし、先述の例では新しい寺院密集地域や新しい氏神の誕生など、それまでの地域のあり方が大きく変化してしまっている。このことから、軍隊が地域社会に及ぼす影響という点で、信仰面の要素もまた無視できない要素の1つであると考えられる。よって、軍港開設が寺社と寺社を取り巻く地域社会に及ぼした影響について取り上げることとした。

ここで、舞鶴を本論の対象地域とする理由について確認しておきたい。

舞鶴は東西に同程度の規模の市街地を持つが、西舞鶴が近世以来の城下町であるのに対し⁶、東舞鶴は近代以降に成立した軍港都市であり、東西で全く異なる顔を持つ。東西の市街地には各宗派の寺院が存在するが、やはりその成り立ちも大きく異なるものである。そのため、軍港開設以降の寺社動向を考える上で、有用な比較対象を備える地域であると考えられる。この点から、舞鶴を本論の対象地域とし、なかでもかつて三舞鶴町とも称された舞鶴町⁷(成立当初の町域)、新舞鶴町、中舞鶴町(余部町)⁸を対象に、特に軍港開設と関わる新・中舞鶴町を中心にみていきたい。

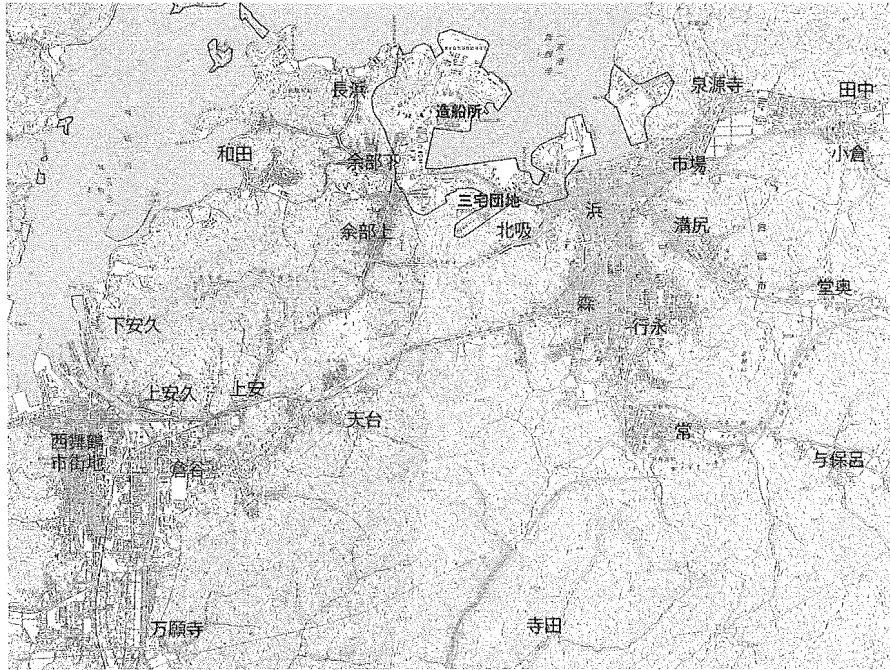


図1 舞鶴地形図

国土地理院刊行 25000 分の 1 地形図「西舞鶴」(2002 年) 及び「東舞鶴」(2007 年) を結合し筆者加筆。

表1 近世浜村寺社状況

名称	所在地	備考
得月庵	浜	菩提寺
彌加宜神社	森	氏神
水無月神社	浜	境内社 2
稲荷神社	浜	境内社 4
蛭子神社	浜	元は神仏習合の蛭子堂
愛宕神社	浜	

西村繁三郎編『波照山得月寺と濱村』(得月寺、1991 年) より作成



写真1 彌加宜神社
2013 年筆者撮影



写真2 白糸浜神社
2012 年筆者撮影

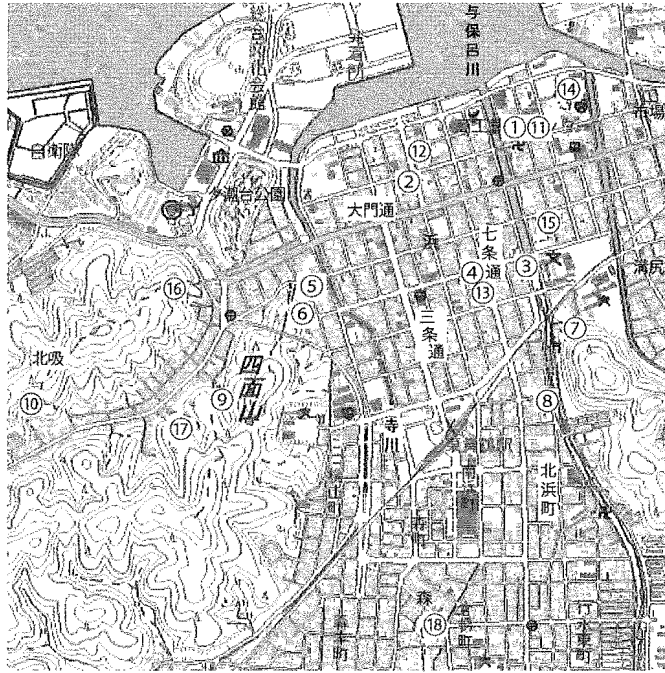


図2 東舞鶴市街地図

①至徳寺 ②宝林寺 ③東浄土寺 ④祥雲寺 ⑤得月寺 ⑥日宗寺 ⑦真言宗弘道寺 ⑧法光寺 ⑨三宝寺 ⑩大聖寺 ⑪カトリック東舞鶴教会
 ⑫東舞鶴聖パウロ教会 ⑬日本基督教団東舞鶴教会 ⑭嶋満神社 ⑮白糸浜神社 ⑯三宅神社 ⑰出雲神社 ⑱彌加宜神社

国土地理院地図閲覧サービス (<http://watchizu.gsi.go.jp/>) より当該地の25000分の1地形図に筆者加筆。

第一章 舞鶴鎮守府と軍港都市の誕生

(1) 舞鶴軍港概要

軍港開設以前の東舞鶴は、農業・漁業を中心とした村落が点在する地域であった。ここに、明治34(1901)年に、4番目の鎮守府として舞鶴鎮守府が開かれたことで、急速に軍港都市として発展していくこととなる。多くの土地が海軍用地として買い上げられ⁹、艦船の停泊に適すよう海岸線が埋め立てられ、北吸から長浜にかけて軍港関連施設の建設が進められた¹⁰。図1の海岸沿いの線で囲んだ地域が海軍用地として接収された土地である(舞鶴軍港の推移に関しては、年表を参照されたい)。

(2) 東舞鶴・中舞鶴の都市化

東舞鶴の中心市街地は、寺川と与保呂川に挟まれた河口付近の浜¹¹と呼ばれる地域である。

軍港開設と新市街地造成は、京都府と海軍の主導の下で行われた¹²。住民から多くの土地が買い上げられ、現在の三宅団地付近にあった北吸では、住民の全戸移転が要求さ

表2 旧三舞鶴町現存寺院

名称	所在地	宗派	第二章(2)における分類	地域
至徳寺	浜	真宗大谷派	Ⅲ	新舞鶴町
祥雲寺	浜	曹洞宗	Ⅳ	新舞鶴町
真言宗弘道寺	浜	単立	Ⅲ	新舞鶴町
得月寺	浜	臨済宗天竜寺派	Ⅰ	新舞鶴町
日宗寺	浜	日蓮宗	Ⅳ	新舞鶴町
東浄土寺	浜	浄土宗	Ⅲ	新舞鶴町
宝林寺	浜	浄土真宗本願寺派	Ⅲ	新舞鶴町
法光寺	北浜町	顕本法華宗	Ⅳ	新舞鶴町
清光寺	溝尻	臨済宗天竜寺派	Ⅰ	新舞鶴町
三宝寺	北吸	真宗高田派	Ⅳ	新舞鶴町
大聖寺	北吸	真言宗醍醐派	Ⅴ	新舞鶴町
雲門寺	余部上	臨済宗天竜寺派	Ⅱ	中舞鶴町
聖徳寺	余部上	浄土宗西山禅林寺派	Ⅲ	中舞鶴町
真宗寺	余部上	真宗大谷派	Ⅲ	中舞鶴町
地運寺	余部上	曹洞宗	Ⅳ	中舞鶴町
明教寺	余部上	浄土真宗本願寺派	Ⅳ	中舞鶴町
本告寺	余部下	日蓮宗	Ⅲ	中舞鶴町
長江寺	和田	単立	Ⅱ	中舞鶴町
円隆寺	引土	真言宗御室派	Ⅰ	舞鶴町
本行寺	引土新	法華宗真門流	Ⅰ	舞鶴町
桂林寺	紺屋	曹洞宗	Ⅰ	舞鶴町
浄土寺	新	浄土宗	Ⅰ	舞鶴町
見海寺	西	浄土宗	Ⅰ	舞鶴町
見樹寺	西	浄土宗	Ⅰ	舞鶴町
松林寺	西	浄土宗	Ⅰ	舞鶴町
妙法寺	西	日蓮宗	Ⅰ	舞鶴町
瑞光寺	寺内	浄土真宗本願寺派	Ⅰ	舞鶴町
鶴集寺	南田辺	本門仏流宗	Ⅲ?	舞鶴町
聖福寺	南田辺	真言律宗	不明	舞鶴町

れた。そのため、浜の寺川西側の土地の一部が北吸の人々へと譲られた¹³。現在の北吸交差点周辺や余部上まで延びる道芝通沿いがそれである¹⁴。

大きく曲がって舞鶴湾に注いでいた与保呂川は、直流するよう付け替えられた。道路は碁盤目状に整備され、その中心は鎮守府東門から東に走る幅 18 m の大門通である¹⁵。明治 37 (1904) 年には鉄道が開通し、新舞鶴駅が設置された。

商業地域の形成は、鎮守府東門付近から始まった。軍港建設が本格化して以降、鎮守

舞鶴軍港関連年表

明治 20 年 (1887)	9 月	舞鶴鎮守府開庁内定	天然の良港であること、防御に適す地形であること、ロシア艦隊への備えなどが舞鶴への設置理由
明治 22 年	5 月	舞鶴鎮守府開庁閣議決定	以降、対清政策のため呉・佐世保鎮守府開庁が優先され、軍港建設工事は進まず
		海軍用地買収契約完了	
明治 30 年	3 月	軍港建設工事本格化	北吸から長浜にかけて海軍施設の建設進む
明治 34 年	10 月	四番目の鎮守府として舞鶴鎮守府開庁	
明治 36 年	11 月	舞鶴海軍工廠発足	小型艦艇の建造を中心とし、最小規模の海軍工廠
大正 12 年 (1923)	4 月	鎮守府、要港部へ降格	鎮守府所在地としては唯一の要港部への降格を経験。
		舞鶴海軍工廠、舞鶴海軍工作部へ降格	
昭和 11 年 (1936)	7 月	舞鶴海軍工作部が工廠へ昇格	戦時色強まる
昭和 14 年	12 月	舞鶴鎮守府復活	
昭和 20 年	10 月	舞鶴鎮守府閉庁	
昭和 25 年	6 月	旧軍港都市転換法成立	軍港の旧遺産を活用して平和産業都市へ
昭和 27 年	8 月	警察予備隊舞鶴地方隊編成	これにより軍港としての舞鶴復活

出典：舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史・年表編』（舞鶴市役所、一九九四年）をベースに舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史・通史編（中）』（舞鶴市役所、一九七八年）、舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・通史編（下）』（舞鶴市役所、一九八二年）、舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史・現代編』（舞鶴市役所、一九八八年）を参考に作成

府東門に近い得月院（現在の得月寺）前の門前町付近に日用品店などができ始め、その後次々と増えていった。しかし、付近で海軍官舎などの建設が進むと、商業地は東へと移動し、大門通に商店街が形成された。また、三条通は鉄道開通により、駅前通りとして繁栄した¹⁶。軍港工事の関係者、軍人、それらをあてにした商人などが大量に流入し、明治 9（1876）年に 111 戸であった浜の戸数は、同 39（1906）年には 1,026 戸となった¹⁷。また、表 3 をみてみると明治 41（1908）年の新舞鶴町の現住人口 9,430 人のうち、本籍人口は 2,801 人であり、外部からの人口流入の多さが分かる¹⁸。

このようにして『新舞鶴唱歌』（後掲・資料 1 - 以下、資料はすべて後掲とする）で「巡りし市街は黄昏て 眼下に廣し高薈 軍港あらね其の昔 村の面影いま何處」¹⁹と歌われる東舞鶴の市街地は形成されていった。

一方、中舞鶴でも、『餘部唱歌』（資料 2）で「十年あまりの其の昔 すがた何處に残るらん 家わづかなる村里の 巡りし今日の追懐や」²⁰と歌われるように、大きな変化が起こった。

中舞鶴の中心となるのは余部上、余部下である。これらもまた浜同様、地方の寒村であり、明治初年の余部下村の戸数は 50 戸ほどであった²¹。しかし、軍港建設工事により浜や北吸と同じく激動の渦に巻き込まれることとなり、特に現在の海上自衛隊余部宿

表3 帝国人口静態統計にみる舞鶴地域の人口の推移

年次	1898	1903	1908	1913	1918	1898	1903	1908	1913	1918
	現住人口(人)					本籍人口(人)				
舞鶴町	8,856	9,811	14,827	15,399	11,191	9,229	9,632	10,114	10,523	10,877
余内村	3,098	4,268	4,756	2,890	2,874	2,805	2,050	2,123	2,282	2,392
余部町 (中舞鶴町)	—	2,857	9,018	11,836	12,999	—	1,110	2,147	2,949	3,906
新舞鶴町	—	—	9,430	12,261	20,620	—	—	2,801	3,822	4,614
倉梯村	3,270	6,182	3,287	3,541	3,772	3,262	3,712	2,386	2,605	2,776
志染村	2,355	2,478	2,043	2,027	2,031	2,408	2,426	2,118	2,155	2,185

山神達也「近代以降の舞鶴の人口」『軍港都市史研究1』(清文堂、2010年)より抜粋。

表4 明治17年『寺院明細帳』にみえる地域別宗派数

宗派	西舞鶴の数	東舞鶴の数
曹洞宗	31	2
臨済宗東福寺派	6	25
臨済宗天竜寺派	0	6
臨済宗南禅寺派	0	3
臨済宗妙心寺派	3	0
真言宗	8	8
浄土宗	5	0
真宗本願寺派	2	1
真宗大谷派	1	0
日蓮宗	0	2
天台宗寺門派	1	0

宗派名は史料中の表記に従う。

舎付近などに住んでいた余部下の住民達は、ほとんどが移転させられることとなった²²。

現在の海上自衛隊余部宿舎付近に鎮守府庁舎が建ち並び、現在のジャパンマリンユナイテッド²³の位置には舞鶴海軍工廠が建設された。中心となる道路は、鎮守府西門から西へと走る西大門通と南へと走る本町通で²⁴、道沿いには短冊状の市街地が形成された。

やはり中舞鶴でも軍人、職工の大量流入により人口が増大した。明治22(1889)年の段階で54戸であった余部下の戸数は、同32(1897)年には130戸となった。しかし、商業地としては振るわず、軍港建設工事が一段落してからは、特に商業不振が激しくなった。そのため、住民が熱心に遊郭設置運動を行い、明治38(1905)年に加津良に遊郭が

設置された。しかし、それでも鉄道の終点となった東舞鶴から商業的繁栄を奪うことは難しく、以後も職工の街としての性格は変わらなかった²⁵。

こうして『餘部唱歌』に「並ぶ柳に霧こむる 数千人の職工の 本町通り朝まだき 工廠さして急ぎ行く」²⁶と歌われる中舞鶴の市街地は形成されていった。

第二章 軍港開設と舞鶴の寺社の動向

(1) 軍港開設以前の舞鶴の寺社の状況

軍港開設以後の寺社の状況を確認する前に、まずは軍港開設以前のそれについて確認しておきたい。

明治17(1884)年の『寺院明細帳』²⁷から同年における現在の舞鶴市域の寺院数を確認したものが表4である。傾向としては、諸派を合計した臨済宗が最も多く、曹洞宗がこれに続く²⁸。このうち、臨済宗寺院は東部に多く、雲門寺(図3②、写真3)が最大規模の檀家数を誇る。一方、曹洞宗寺院は西部に多く、桂林寺(図4⑥、写真4)が

表5 『寺院明細帳』にみえる舞鶴町域の寺院

名称	宗派	所在地	備考
延寿院	真言宗	竹屋	祈祷寺、904年創建、1861年職人町から移転、1906年廃寺
浄土寺	浄土宗	新	巨勢金岡により河辺村に天台宗寺として創建、1533年浄土宗に、1558年福来村に移転、1600年福来村から丹波町へ移転、1688年に現在地へ移転
見樹寺	浄土宗	西	瑞泰寺の位置に、寛文年間千葉の関宿から見樹寺を移転
松林寺	浄土宗	西	源信が笛原寺として創建(建部山上)、応永年間に現在地へ移転、1622年現在の寺号
見海寺	浄土寺	西	延宝年間創建
妙法寺	日蓮宗	西	慶長年間創建
瑞光寺	真宗本願寺派	寺内	1594年創建
桂林寺	曹洞宗	紺屋	1401年洞林寺として創建、宝徳年間現在の寺号
円隆寺	真言宗	引土	長徳年間創建
成就院	真言宗	引土	円隆寺塔頭、長徳年間創建、1913年円隆寺に合寺
理正院	真言宗	引土	円隆寺塔頭、1913年円隆寺に合寺
本行寺	日蓮宗	引土新	1556年上安久に創建、1601年現在地へ移転
願蔵寺	真宗大谷派	堀上	1596年朝代に創建、1646年堀上へ移転・願蔵寺に改号、1894年宮崎県都城に移転

宗派名は『寺院明細帳』の表記に従う。『寺院明細帳』、「松本節子の舞鶴・文化財めぐり」『舞鶴市民新聞』、今井章造ほか編『我が郷土』(加佐郡明倫尋常高等小学校、1932年)、舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・史料編』(舞鶴市役所、1973年)から作成

最大規模の檀家数を誇る。また、近隣の36ヶ寺が、桂林寺と本末関係にあった²⁹。なお、市域の中で最古の寺院は、大浦半島に位置する伝用明天皇2(587)年創建の多禰寺である³⁰。また、村落部では概ね一村に一ヶ寺といった状況で、例えば浜村では得月庵(得月寺、図2⑤、写真5)、溝尻では清光院が存在する。近世の浜の寺社の状況は表1の通りである。一方、中舞鶴のように余部下村の雲門寺(現在は余部上)が、余部上、余部下、長浜、和田、北吸といった周辺五村の寺となっている場合もある³¹。また、長浜の高倉神社(図3⑦、写真6)が、先述の五村及び下安久の氏神であった³²。

『寺院明細帳』にみえる近世城下町である舞鶴町域の寺院は、表5の通りである。様々な宗派の寺院が存在し、瑞光寺³³(図4⑨、写真7)や見樹寺³⁴(図4①)などのように城主との関係で開かれた寺院や、延寿院や本行寺³⁵(図4⑦、写真8)など城下町形成の中で移転させられた寺院などが多く存在する。その立地は、多くが市街地西部の愛宕山麓に位置し、そこからほど近い瑞光寺・願蔵寺も加え、西方から攻めよせる敵への防衛線をなしている。このように、舞鶴町域内の寺院は、城下町形成の歴史と密接な関わりを持つ。また、町民の多くがこれらの檀家であった³⁶。

軍港開設までは、舞鶴町域のみに各宗派の寺院が密集しており、他地域では多くても2～3宗派の寺院がある程度であった。また、寺院自体も村の寺という形で、一村一ヶ寺程度のところがほとんどであった。この状況が、軍港開設により新しい都市が誕生したことで、大きく変化することとなる。

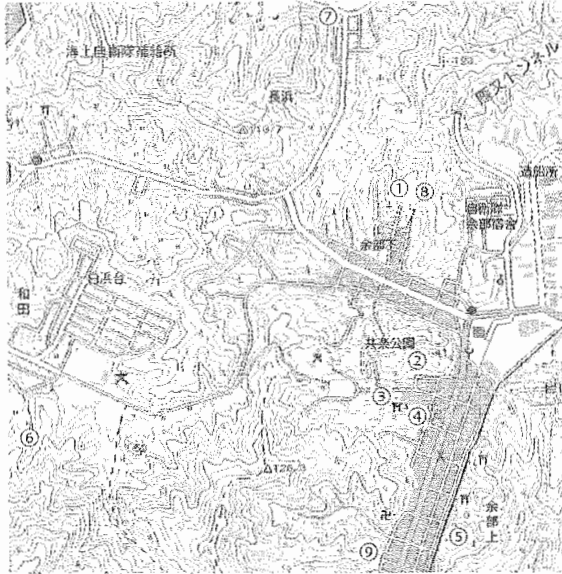


図3 中舞鶴市街地図

①本告寺 ②雲門寺 ③地運寺 ④明教寺 ⑤真宗寺 ⑥長江寺 ⑦
高倉神社 ⑧余部稲荷神社 ⑨若宮神社
国土地理院地図閲覧サービス (<http://watchizu.gsi.go.jp/>) より当該地
の25000分の1地形図に筆者加筆。



写真3 雲門寺
2013年筆者撮影



写真4 桂林寺
背後に見えるのは愛宕山
2012年筆者撮影

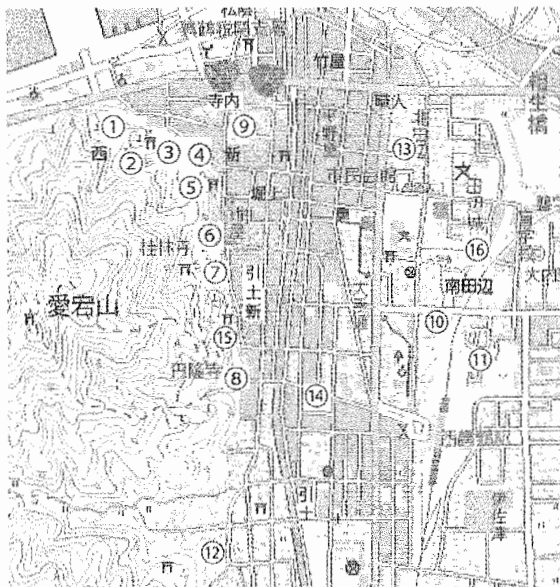


図4 西舞鶴市街地図

①見樹寺 ②松林寺 ③見海寺 ④妙法寺 ⑤浄土寺 ⑥桂林寺 ⑦
本行寺 ⑧円隆寺 ⑨瑞光寺 ⑩鶴集寺 ⑪聖福寺 ⑫天理教山陰大教
会 ⑬カトリック西舞鶴教会 ⑭日本イエス・キリスト教団西舞鶴教
会 ⑮朝代神社 ⑯田辺城址
国土地理院地図閲覧サービス (<http://watchizu.gsi.go.jp/>) より当該地
の25000分の1地形図に筆者加筆。

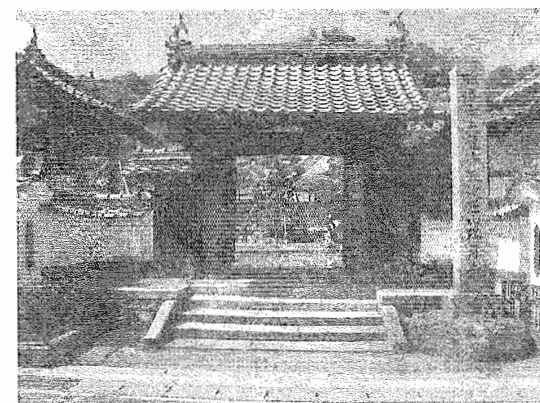


写真5 得月寺
2012年筆者撮影

(二) 軍港開設と寺院の創建・移動

舞鶴の寺院を軍港開設以降に主眼を置いて分類すると次のようになる³⁷。

- I. 軍港開設以前からのもの
- II. 軍港開設以前から存在していたが軍港建設工事などで移動したもの
- III. 教会所を前身とするもの
- IV. 教会所に他の地域にあった寺院を移転したもの
- V. 布教のために他の地域にあった寺院を移転したもの

このうち、いわゆる新しい寺院は、III～Vにあたるものである。一方、I～IIにあたるいわゆる古い寺院も、軍港開設による影響を大なり小なり受けてきた。

寺院の設立・移転状況

「得月院や鏡智院 清光院に杖曳かば 神道、佛教、耶蘇教の 教会所をも訪ねひ寄らん」³⁸と、『新舞鶴唱歌』に歌われるように、新舞鶴には多くの教会所が設立された。

教会所の動向については、現在後身となる施設さえ残っていない場合も多いことなどから不明な点が多い。そのような中でも、大正12(1923)年時の教会所の状況が分かる『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』³⁹をまとめたものが表6である。これをみると、資料作成段階で設立中・設立許可待ちのものも含め、仏教系の教会所は新舞鶴町で6ヶ所、中舞鶴町で9ヶ所、舞鶴町で1ヶ所存在する。これ以前の新舞鶴の教会所として、明治44(1911)年には日宗会堂と曹洞宗光明寺教会出張所が存在する⁴⁰。また、大正5(1916)年の『新舞鶴町治一斑』⁴¹中の教会所をまとめたものが表7である。表2はかつての舞鶴町、新舞鶴町、中舞鶴町域内に現存する寺院である。これらの中には、教会所を前身とするものが、特にかつての新舞鶴町、中舞鶴町域で多く存在する。表2のうち分類III、IV、V、VIの寺院の推移について簡単に確認したものが表8である。

教会所を前身とする場合

まずはIIIについていくつかの寺院の例をみていきたい。新舞鶴町で『神佛道教会所現存届』の設立許可年が最も古いものは、宝林寺(図2②、写真9)であり、明治41(1908)年に本願寺派の説教所として設立が許可されている。至徳寺(図2①、写真10)がそれに次ぎ、こちらは明治43(1910)年に大谷派の説教所として設立が許可されている⁴²。大谷派の説教所は、当初現在の東浄土寺(図2③、写真11)の位置にあったが、昭和10(1935)年に現在地へ移転している。翌年、跡地に東浄土寺の前身となる浄土宗の教会所が設立された。中舞鶴の本告寺(図3①、写真12)は、各地を巡っていた船木日圓が、明治37(1904)年に余部町にとどまり、かつて雲門寺にあった八大竜王の軸を掲げたことを起源とする。やがて人々が集まるようになり、大正十(1921)年⁴³には京都市の妙顕寺の支援も受けながら立正教会の建設が終了した(資料3)。

教会所に既存の寺院が移転してきた場合

次にIVについていくつかの寺院の例をみていきたい。明治39(1906)年に日蓮宗の教会所として浜に日宗会堂が開かれた。ここに大正5(1916)年に岩滝村の恵林院を移転する形で寺号を公称するようになり、翌年日宗寺(図2⑥、写真13)と改めた⁴⁴。法光寺(図2⑧、写真14)の起源は、明治41(1909)年に、西舞鶴本行寺の檀家であった桑村儀俊が、新舞鶴で設立した信行会にある。その後、儀俊の子弥一が本多日生のもとで修業し、大正十年(1921)年に顕本法華宗へと改宗。さらに、大正12(1923)年に信行会と改号、同14(1925)年に千葉県で名前だけを残していた寺院の号を移し法光寺となった⁴⁵(資料4)。明教寺(図3④、写真15)については、余部下にあった西

表6 大正12年『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』教会所一覧

名 称	場 所	宗 派	設 立 年
山陰分教会	舞鶴町	天理教	1891年設立許可
舞鶴教会所	舞鶴町	金光教	1897年設立許可
舞鶴教会所	舞鶴町	黒住教	
本門佛立講舞鶴教会所	舞鶴町	本門法華宗	1922年設立許可
芦鶴宣教所	舞鶴町	天理教	1924年設立許可
山海宣教所	新舞鶴町	天理教	1895年設立許可
新舞鶴教会所	新舞鶴町	黒住教	1910年設立
舞鶴教会所	新舞鶴町	大社教	1909年設立許可
八島教会所	新舞鶴町	御嶽教	1918年設立願
岩室稲荷教会	新舞鶴町	神道	1918年設立許可
本願寺説教所	新舞鶴町	真宗本願寺派	1908年設立許可
三寶寺説教所	新舞鶴町	真宗高田派	1917年設立許可
新舞鶴布教所	新舞鶴町	曹洞宗	1924年設立許可
新舞鶴説教所	新舞鶴町	顕本法華宗	1924年設立許可
本願寺説教所	新舞鶴町	真宗大谷派	1910年設立許可
光雲説教所	新舞鶴町	浄土宗西山禪林派	1924年設立許可
東舞鶴宣教所	中舞鶴町	天理教	1895年設立許可
餘部教会所	中舞鶴町	金光教	1897年設立許可
三舞鶴金刀比羅教会	中舞鶴町	御嶽教	1921年設立願
立正教会所	中舞鶴町	日蓮宗	1921年建設終了
日蓮宗教会所	中舞鶴町	日蓮宗	1899年設立許可
本願寺説教所	中舞鶴町	真宗大谷派	1899年設立許可
錦織寺説教所	中舞鶴町	真宗木辺派	1920年設立許可
高野山大師教会中舞鶴支部	中舞鶴町	真言宗各派聯合	1923年設立願
両丹稲荷教会	中舞鶴町	実行教	1924年設立許可
中舞鶴若宮支部	中舞鶴町	真言宗各派聯合	1924年設立許可
護王教会中舞鶴支部	中舞鶴町	真言宗東寺派	1924年設立許可
中舞鶴説教所	中舞鶴町	真宗本願寺派	1924年設立許可
聖徳教会所	中舞鶴町	浄土宗西山禪林派	1924年設立許可
一之橋宣教所	倉梯村	天理教	1892年設立許可
大雲宣教所	岡田上村	天理教	1894年設立許可
日吉教会所	餘内村	天理教	1896年設立許可
舞鶴宣教所	餘内村	天理教	
東雲宣教所	東雲村	天理教	1894年設立許可
志高小教会所	岡田下村	黒住教	
日岡教会所	東大浦村	黒住教	1907年新築
稲荷教会本部	餘内村	実行教	1923年設立願
岩室稲荷最上講社	志染村	神道	1921年設立許可
桂林寺吉原説教所	餘内村	曹洞宗	1917年設立終了
妙勝教会	中筋村	日蓮宗	1921年建設終了

現在の舞鶴市域にあるものを抜粋。名称、所在地、宗派、設立年は史料中の表記に従う。

表7 『新舞鶴町治一斑』にみえる教会所

名称	宗派	位置
本願寺派本願寺説教所	真宗	大字浜（四条通富士角）
大谷派本願寺説教所	真宗	大字浜（九条通朝日北入）
曹洞宗布教所	曹洞宗	大字浜（六条通富士角）
清福寺出張所	真宗高田派	大字浜（五条通富士北入）
曹洞宗光明寺教会出張所	曹洞宗	大字浜（九条通八島南入）
日蓮教会所	日蓮宗	大字浜（四条通八島北入）
日本聖公会新舞鶴基督講義所	基督教	大字浜（四条通富士角）
日本基督教会新舞鶴伝道協会	基督教	大字浜（四条通八島角）
黒住教新舞鶴教会所	黒住教	大字浜（五条通敷島南入）
大社教新舞鶴教会所	大社教	北吸（葛城通）
天理教郡山大教会山陰分教会山海宣教所	天理教	溝尻（高千穂通大門南入）

名称、宗派、位置の表記は『新舞鶴町治一斑』の表記に従う

表8 軍港開設以降に開かれた寺院動向

名称	創建年
至徳寺	1907年新舞鶴説教所、1977年現在の寺号
祥雲寺	1901年曹洞宗布教所、1924年再度設立許可、1944年中山の祥雲寺を移転する形で現在の寺号
弘道寺	1923年高野山大師教会中舞鶴支部、1928年浜に移転・高野山大師教会新舞鶴弘道支部、1935年現在地へ移転、戦後改号？
日宗寺	1906年日宗会堂、1916年岩滝村恵林院を移転する形で寺号改称、1917年現在の寺号
東浄土寺	1936年新舞鶴教会所、1970年現在の寺号
宝林寺	1908年本願寺説教所、昭和30年代に現在の寺号に
三宝寺	1908年真宗高田派説教所、1917年三宝寺説教所設立許可、1931年三重県の三宝寺を移転する形で現在の寺号
大聖寺	1902年青葉山より鏡智院を移転、1941年現在の寺号に改称
法光寺	1909年信行会、1921年統一団新舞鶴支部、1923年信行寺と改称、1925年千葉県法の法光寺を移転する形で現在の寺号
聖徳寺	1905年松山眞梁が教会所、1924年伊藤典隆が府に教会所設立申請、1969～1975年に現在の寺号
地運寺	1908年曹洞宗布教所、1923年油江の地雲寺を移転する形で現在の寺号
真宗寺	1899年東本願寺説教所、戦後改号？
明教寺	1920年中舞鶴教会、1935年岐阜県の明教寺を移転する形で現在の寺号
本告寺	1921年立正教会建設終了、1948年現在の寺号
鶴集寺	1922年本門佛立講舞鶴教会所、戦後改号？
聖福寺	不明

資料 2・4・5・10、稲田尚氏への聞き取り、谷公人氏への聞き取り、堀尾祐真氏への聞き取り、『寺院規則（宗教団体）制定ノ件』（1942年）、『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』（1923年）、全日本仏教会寺院名鑑刊行会編『全国寺院名鑑』（1969年、全日本仏教会寺院名鑑刊行会）、船越英俊編『桂林の門葉』（殷岩寺、1984年）、舞鶴海軍工廠堀内中佐『工廠附近に在る神様仏様の由緒（一）』（1919年）、舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・各説編』（舞鶴市役所、1975年）から作成

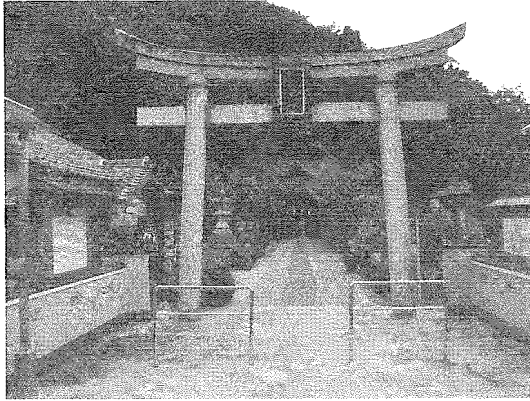


写真6 高倉神社
2013年筆者撮影



写真7 瑞光寺
2013年筆者撮影



写真8 本行寺
2013年筆者撮影

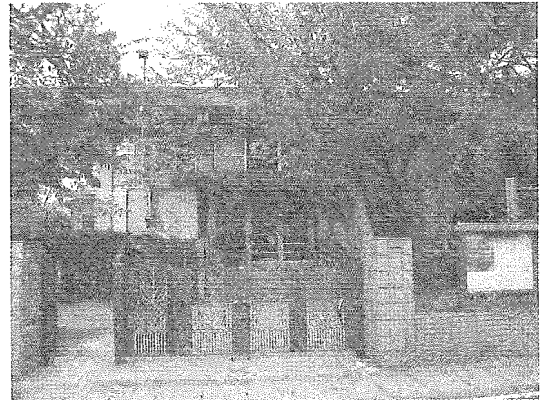


写真9 宝林寺
2013年筆者撮影

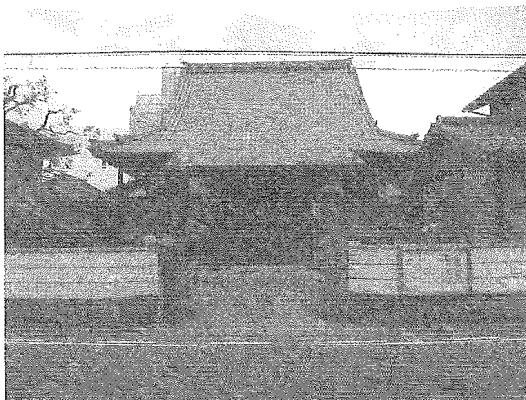


写真10 至徳寺
2013年筆者撮影



写真11 東浄土寺
2012年筆者撮影



写真 12 本告寺
2013 年筆者撮影



写真 13 日宗寺
2013 年筆者撮影



写真 14 法光寺
2013 年筆者撮影



写真 15 明教寺
(西洋建築風の要素を取り入れた本堂)
2013 年筆者撮影



写真 16 大聖寺
2013 年筆者撮影



写真 17 長江寺
2012 年筆者撮影

本願寺余部仮布教所に起源をみることができる。軍隊布教の宿所を後に布教所とし、大正8(1919)年に着任した三浦静雲が現在地へと移転した⁴⁶。その後、昭和10(1935)年に岐阜県の谷文雄が自坊を移転し、現在の寺号となった⁴⁷。

既存の寺院が移転してきた場合

他に軍港開設以後開かれた寺院として、Vのパターンがある。これに該当するのは、大聖寺である(図2⑩、写真16)。「新舞鶴唱歌」で得月院の次に出て来る「鏡智院」がこれのことで、明治35(1902)年に松尾寺で廃寺となっていた塔頭を移転してきたものである(資料5)。その後、昭和17(1942)年に現在の寺号に改めた⁴⁸。

先述の寺院移転の例でもみられることであるが、新しい都市である新・中舞鶴町は、衰退していた古刹の受け皿的面も持っていた。一方、舞鶴町では、明治27(1894)年に堀上の願蔵寺が宮崎県都城市に移転している。願蔵寺は、江戸時代の火災や、維新後の潮流の中で衰退していた。そこで、真宗の勢力が弱かった宮崎県へと移転し、現在ではそこで寺勢を回復している⁴⁹。このように、三舞鶴町への移転だけでなく、三舞鶴町から新天地へと移転していく例もみられた。

軍港開設以前の寺院で軍港開設の影響を強く受けた場合

以上が新しい寺院と呼べるものの設立状況である。最後に、旧来の寺院でありながら、軍港開設の影響を強く受けたものであるIIをみていきたい。これに該当するのは、雲門寺、長江寺である。普明国師により開かれた雲門寺は、かつて余部下に位置していたが、明治22(1889)年に先述の余部下の強制移転により現在地へと移った⁵⁰。円仁により開かれたといわれる長江寺⁵¹(図2⑥、写真17)は、昭和17(1942)年に海軍の倉庫群建設のため、海の近くから東側の山中にある現在地へと移転させられた⁵²。

(三) 軍港開設と寺院の設立・移転についての分析

本節では、前節でみてきた寺院の設立や移転に関して、より詳細に分析していきたい。

まず、教会所の設立理由についてだが、『神佛道教会所現存届』の情報や聞き取りなどから主なものを挙げると、次の4つとなる(例として資料4・6・7・8・9参照)。

1. 新市街地が開かれたことにより人口が急増したため。
2. 新市街地に各宗派の寺院や教会所が存在しないため。
3. 各宗派の門信徒から寺院を望む声が強かったため。
4. 善導教化のため。

また、当時は各宗派が全国的にその宗派が手薄な地域に教会所の設立を行っており⁵³、そのような動きも舞鶴の教会所増加を助けたと考えられる。

松尾寺より移転した大聖寺は、先述の設立理由と似ていながらも、やや異なった移転経緯を持つ。全戸移転させられた北吸の住民達は、中舞鶴との交通分断により、新たに雲門寺末寺の得月寺の檀家となったが、1字1寺を持ちたいと考えるようになった⁵⁴。そこで、住民が松尾寺の懸空に相談し、鏡智院を移転することとなった。浜では、旧来からの住民達は得月寺の檀家であり、教会所の設立には各地から来住した人々の要望が強かった⁵⁵。一方、全戸移転した北吸では、菩提寺を持つための要望は旧来の住民達から出て、創建においても彼らが中心となって活動しており、この点が北吸の特徴といえる。

また、教会所設立に際して門信徒の要望が強かったため、資金集めや土地、家屋の提供など、創建の段階から住民との関わりが強かった。例えば、宝林寺では海軍軍人が発起人となり、集まった門徒達などから資金を集めており⁵⁶、法光寺の前身となる信行会の設立に際しては、信者から土地建物の寄進を受けている⁵⁷。

軍港都市らしく、教会所設立のきっかけに軍隊布教が関わっている場合もある。例えば、祥雲寺の起源となる布教所を開いた塩見覚循は、軍隊布教師として訪れており（資料9）、先述の通り、明教寺の起源となる仮布教所は、元軍隊布教師の宿所であった。

松尾寺のような東舞鶴の古刹だけでなく、西舞鶴の古刹が教会所設立のために動いている例もある。例えば、東浄土寺は、その名の示す通り、西舞鶴の浄土寺との関わりで開かれている。新舞鶴には遠方からの移住者だけでなく、西舞鶴の商人の次男・三男も移住してきていた。その中には、浄土寺の信徒も多く、それらの人々の浄土宗教会所を求める声が浄土寺に届き、教会所が開かれた。東浄土寺の寺号は、西舞鶴の浄土寺があることから通称として呼ばれていたものを、後に正式な寺号として申請したものである⁵⁸。新舞鶴以外の地域でも、中筋村では日蓮宗信徒村上勝らが尽力し妙勝教会が設立され、担任教師という形で当時の妙法寺住職布川恵順が協力している⁵⁹。詳細は不明だが、余内村には近在に布教機関が無いということで、桂林寺吉原説教所が設立されている⁶⁰。

最後に、寺院の立地に関してしてみると、先述の通り舞鶴町では、城下町の名残から多くの寺院が愛宕山山麓に並び⁶¹、寺町⁶²を形成していることが分かる。一方、中舞鶴では、大きな通り沿いの短冊状の地割を抜けた先の山麓に点在しているものが多い。地形上の制約も大きかったであろうが、元々門信徒のために設立されたという性質上、市街地部分での設立が望まれたのではないだろうか。この点は、新舞鶴の北吸の寺院についても同じことが言える。浜での立地についてみると、大門通以北、与保呂川沿い、寺川～四面山に多くみられる。特に、大門通以北には現在では至徳寺、宝林寺の2ヶ寺しか存在しないが、祥雲寺や三宝寺の前身となる教会所もここに存在していた。この一帯は埋立地⁶³であり、そのため土地の確保がしやすかったことが一因であると考えられる。同様のことが、四面山沿いのトンネル工事によって開かれた土地に位置する日宗寺にもいえる⁶⁴。

（四） 神道の動向

軍港の開設は、寺院だけでなく、神社にも影響を及ぼした。また、近代以降には、既存の神社だけでなく、教派神道が一大勢力となっていった。本節では、神社の移転・合祀の状況と、教派神道の中でも舞鶴に大教会を持つ天理教の動向についてみていきたい。

軍港開設と神社の設立・移転について

戦前に移転させられた主だった神社については、表9を参照されたい。少し変わった事例として、三安神社が挙げられる（写真18）。当社は、昭和18（1943）年の海軍記念日に舞鶴海軍病院内に創建されたものであった。しかし、戦後米軍から撤去を命じられたため、当時の彌加宜神社宮司田中稜威が、同社境内へと引き継いだものである。海軍のための神社が、民間に引き継がれ祭祀されている珍しい例といえる⁶⁵。

移転による合祀で、新しい神社が創建された例もある。浜の白糸浜神社がそれで、市街地整備のために図5中の水無月神社（現在の近畿財務局舞鶴出張所管財課の位置）、七条通八島南の蛭子神社、稲荷神社（現在の八島児童公園の位置）を合祀し、大正2（1913）年に創建された⁶⁶。

教派神道の動向

表6をみると、仏教系の教会所だけでなく、教派神道系の教会も多く設立されていることが分かる。本節では、その中でも天理教の動きをみていきたい。

現在の舞鶴地方では、引土の山陰大教会（図4㊸、写真19）が最大規模の教会であり、この地方の多くの教会はその系列にある。舞鶴地方での布教の端緒は、明治22（1889）

表9 神社移転状況

名 称	現在地	旧 地	移転年	理由
出雲神社	北吸交差点西	三宅団地付近	1889年	軍港建設工事のため
三宅神社	三宝寺南西	同上	1889年	同上
愛宕神社	四面山上	夕潮団地公園付近	1891年	同上
余部稲荷神社	本告寺東の山中	ジャパンマリンユナイテッド内 →長浜への峠→現在地	1889年 →1905年	同上
十二月栗神社	高倉神社境内	京大舞鶴水産実験所付近	1928年	海軍爆薬部移転のため
嶋満神社	浮島公園山上	浮島公園→泉源寺1126、 1127→1961年遷座	1939年	軍用地として接収されたため
三安神社	彌加宜神社境内	国立病院機構舞鶴医療センター内	戦後	米軍の撤去指令が出たため

岩室稲荷神社森本太郎氏への聞き取り、旧北会編『北吸邑』（旧北会、1999年）西村繁三郎編『波照山得月寺と濱村』（得月寺、1991年）、村松俊夫『舞鶴ふるさとのやさしき』（村松俊夫、1992年）から作成

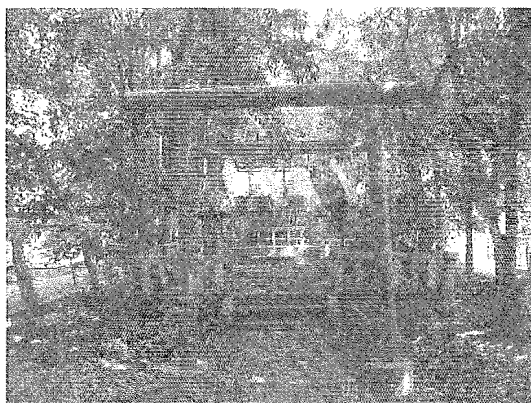


写真 18 三安神社
2013年筆者撮影



写真 19 天理教山陰大教会
2013年筆者撮影

年に郡山分教会（後の郡山大教会）の澤田重左衛門が訪れたことである⁶⁷。以降、明治24（1891）年に松陰に山陰支教会（後の山陰大教会）が開かれたほか、多くの教会が設立された。ただし、新舞鶴や中舞鶴の新市街地では、軍港設立と市街地整備の時期ではなく、大正後期以降といった比較的設立の遅い教会が多い⁶⁸。これは、新市街地造成の時期と、天理教の弾圧時期⁶⁹が重なるためと思われる。また、都市部だけでなく、早い時期に開かれた教会は農村部のものが多く、この点において、各地からの門信徒の流入をきっかけとして、都市部を中心に開かれた仏教系の教会の動きとは異なる。山陰大教会は、昭和14（1939）年に舞鶴港湾区画整理により移転し、同16（1941）年には土地が海軍用地として接収されたため移転している⁷⁰。旧城下町の西舞鶴でも、近在の軍港が伸長した際は、その影響を強く受けた事例といえる。



図5 京都府加佐郡浜村図明治21年5月調

西村繁三郎編『波照山得月寺と濱村』（得月寺、1991年）より抜粋し筆者加筆。

（五）キリスト教の動向

明治6（1873）年のキリスト教解禁以降、紆余曲折を経ながら、キリスト教が日本国内に広まっていくこととなる。本節では、舞鶴におけるキリスト教の動向について、三舞鶴町に教会を置くものを中心にみていきたい。

布教・教会設立の状況

舞鶴方面でのキリスト教伝道の始まりは、カトリックのピリオン神父が明治18（1885）年に宮津・舞鶴方面に訪れ、布教を行ったことである。その後、明治24（1891）年にルラーブ神父により、現在の日本政策金融公庫舞鶴支店付近に仮教会が設立されたことが、舞鶴地方におけるキリスト教教会の始まりである。この教会は、直後に現在の西舞鶴郵便局付近に移転し、明治40（1907）年に現在地へと移転しカトリック西舞鶴教会（図4⑬、写真20）となっている⁷¹。昭和30年代になって、東・中舞鶴にもカトリック教会が設立されたが、現在では中舞鶴の教会は閉鎖されている⁷²。

早くに舞鶴地方で伝道を開始した教派としては、他に聖公会が挙げられる。明治30（1897）年に舞鶴町で布教を始め、翌年舞鶴町で講義所が開かれている。明治34（1904）年には新舞鶴でも講義所が開かれ、翌年2人の幼児が当地方初の聖公会受洗者となっている⁷³。中舞鶴でも明治43（1910）年に余部講義所が開かれたが、昭和4年（1929）年に廃止され⁷⁴、舞鶴町のものも時期は不明だが廃止された。現在は新舞鶴講義所の後身である東舞鶴聖パウロ教会（図2⑭、写真21）のみとなっている。

日本基督教団東舞鶴教会（図2⑬写真22）の起源は、明治43（1910）年に新舞鶴



写真 20 カトリック西舞鶴教会
2013年筆者撮影



写真 21 東舞鶴聖パウロ教会
2012年筆者撮影

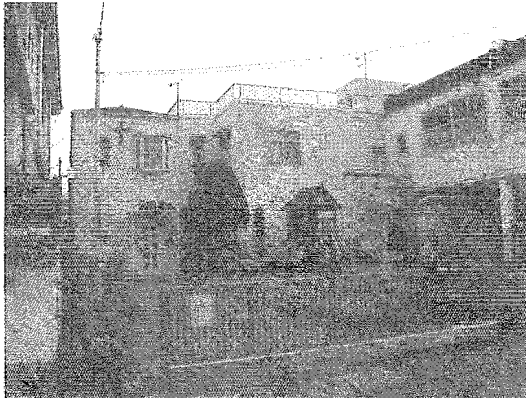


写真 22 日本基督教団東舞鶴教会
2013年筆者撮影

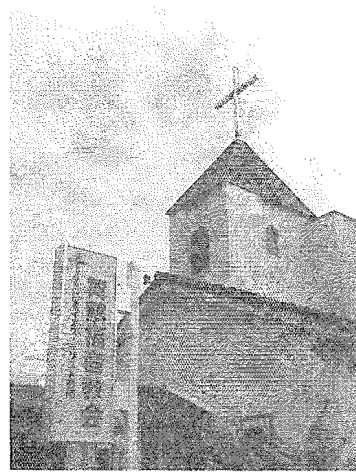


写真 23 舞鶴福音教会
舞鶴福音教会 Web サイト (<http://www.maizuru-fukuin.org/qhcn/>) より



写真 24 日本イエス・キリスト教団西舞鶴教会
2013年筆者撮影



写真 25 得月寺境内石造物
〔「右まつのてら」と刻まれた道標〕

2013年筆者撮影

町八島四条角に講義所が設立されたことにある。現在の東舞鶴教会としては、昭和10(1935)年に西村直牧師が、三条通沿いの自宅を教会として開放したことに始まる。翌年、西村牧師所有の土地に新しい会堂を建て、そこへ移転した⁷⁵。

日本イエス・キリスト教団の教会は、現在東(図2「溝尻」の南東、写真23)と西(図4④、写真24)に一カ所ずつある。舞鶴地方では、大正末期に西舞鶴から日本伝道隊の活動が始まり、聖書学舎女子部、日の出女児園、舞鶴キリスト教会が設立され、伝道の拠点となった。日本イエス・キリスト教団の教会としては、昭和28(1953)年頃から活動しており、現在地の会堂は同52(1977)年からのものである⁷⁶。東舞鶴では、昭和8(1933)年に伝道隊により、信徒の群れができ、時期は不明だが南浜町に教会が開かれている。これが現在の舞鶴福音教会の前身であり、昭和62(1987)年に駅周辺の整備で溝尻の現在地へ移転している。中舞鶴でも教会が開かれていたが、戦争末期に牧師が応召されたことにより閉鎖されている⁷⁷。

また、戦前にはホーリネス教会なども伝道をおこなっていたようだが、現在は存在しない⁷⁸。

第三章 寺社と地域社会・軍港との関わり

(一) 寺社と地域社会との関わり

前章までに軍港開設が寺社の設立・移転にどのような影響を与えてきたかを確認した。本節では、そのような寺社の動きが地域社会に与えた影響、あるいは地域社会からどのような影響を受けたかについて浜と北吸を例にみていきたい。

浜

表1のような浜の姿は、軍港開設により一変することとなる。先述の通り、各地から移住者のために寺院や教会所が増加した。軍港開設の影響は新しい寺院や教会所だけにとどまらず、古刹である得月寺でも檀家数が増加し、新旧の檀家で寺を支える形となっている⁷⁹。

軍港都市という人口の変動の激しい都市のあり方は、信徒として一時的に寺を訪れる人々の数にも影響を及ぼしている。例えば、戦時中の宝林寺では、多くの人々が説教を聞きに訪れ、本堂前のイチヨウの木の下では、堂内を上官に譲った水兵達が立ち聞きしていたそうだ⁸⁰。一方、海軍解体後には、例えば資料10から、信徒が大幅に減少した様子が分かる。西舞鶴でも、舞鶴要塞の拡充や、昭和18(1943)年の倉谷の舞鶴海軍工廠第二造兵部設立など、軍関係の人口流入は少なからずあったとみられる。しかし、資料や聞き取りからそれらについてはほとんど確認出来ず、新住民によって支えられた新しい寺院が多い地域と、既に基盤が出来あがっている古刹が多い地域との意識の違いが見られる⁸¹。

これらの新しい寺院、教会所は、各地から流入した人々が集う場にもなった。例えば、説法や寺の行事などの際には、市街地に点在する人々や一時的に入港している艦艇の軍人が集まった⁸²。行事そのものはどこにでもみられるありふれたものだとしても、新興地において宗教を通じての住民の紐帯のための要素となったのである。それは、従来ほぼ臨済宗しか存在しなかった新舞鶴及び中舞鶴において、複数の新しい宗教的柱の出現でもあった⁸³。また、広い建物を持っているということで、公会堂として使われる場合もあり、例えば元浜区の明治から大正時代の新年の総会は、たびたび九条本願寺(現在の東浄土寺の位置)で開かれている⁸⁴。

表 10 近世北吸寺社状況

名称	所在地	備考
雲門寺	余部下→余部上	菩提寺
阿弥陀堂	北吸	
高倉神社	長浜	氏神
大荒神	北吸	大荒神→北吸神社→三宅神社
出雲神社	北吸	

旧北会編『北吸邑』（旧北会、1999年）、舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・史料編』（舞鶴市役所、1973年）から作成

得月寺の境内には、軍港開設によって村内の石造物がいくつか移動させられており、例えば「右まつのてら」と書かれた石標などがある⁸⁵（写真25）。これらは、激変してしまった浜のかつての姿を伝える数少ない事物である。

浜の信仰上の様相を一変させた要素として、寺院（教会所）の激増ともう一つ白糸浜神社の創建がある。

表1の通り、旧来の浜では村内で四社を祭祀し、隣村の森の彌加宜神社を氏神としていた。丹波道主命創建の伝承を持つ古社であり、近世には森、行永、浜の三村の氏神とされていた⁸⁶。この彌加宜神社を中心とした世界に、軍港開設をきっかけとして、新たに白糸浜神社という柱が出現した。彌加宜神社の氏子から浜が分離し、白糸浜神社は新舞鶴町という新しい街の氏神となった⁸⁷。新舞鶴町（東舞鶴市）の公的な戦勝祈願や戦没者慰霊祭、東舞鶴市市制奉告祭などの行事もここを中心として行われている⁸⁸。

『社神明細帳』によると、大正7（1918）年の白糸浜神社の氏子数は2,607戸となっているが、同9（1920）年には3,134戸に増加しており、街の発展とともに、急速に勢力を拡大している。また、土地柄と設立経緯からか、海軍軍人の崇敬も集めており、直接の参拝や宮司が出向いての祈禱も多く行われていた⁸⁹。戦後も、かつての軍人が参拝することがあるようで、例えば、昭和53（1978）年にはキスカ島の戦いに参加した将兵から、キスカ島の石が奉納されている⁹⁰。先述の急激な人口増加や官からも重要視されていたと思われる事柄からか、新しい神社ながら、大正7（1918）年には村社、同13（1924）年には郷社に昇格している。そして、昭和19（1944）年には彌加宜神社とともに府社に昇格している⁹¹。この府社への昇格時期からも、官から重要視されていたことが推察される。また、当社は、都市に新しく創建された神社ということもあって、祈年祭などの田に関する祭りが存在しない⁹²。

北吸

軍港開設によって大きく変化した地域の例として、もう一つ北吸を取り上げる。先述の通り、現在の北吸の中心地域は、軍港建設工事による全戸移転で開かれた。古くは、長浜、余部上、余部下、和田、下安久とともに余部郷を形成していた⁹³。移転前の北吸の社寺の状況は表10の通りである。古くは、対岸の多禰寺を菩提寺としたといわれ、後に雲門寺の檀家となった。その後の経過については先述の通りである。氏神に関しても、やはり旧来の氏神である高倉神社から遠く離れてしまったため、新たに三宅神社（図2⑩、写真26）を氏神としている。ただし、完全に高倉神社との関係がなくなったということはなく、明治37（1905）年には三宅神社裏の山中を抜けて高倉神社へと向かう「八幡道」が開かれている⁹⁴（写真27）。また、戦前の高倉神社郷社昇格に関する資料などに北吸氏子総代の氏名が記載されている（資料11）。ただし現在は、個人的な参詣はと



写真 26 三宅神社
2011年筆者撮影

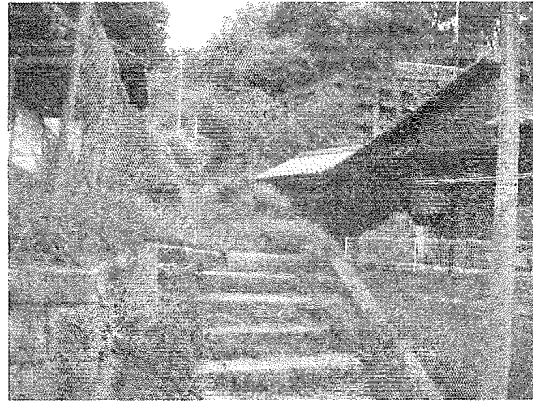


写真 27 八幡道
2013年筆者撮影

もかくとして、高倉神社の祭礼などに北吸の氏子会が関わっているということはない⁹⁵。

(二) 海軍・軍港と寺社との関わり

軍人の参拝・祈願・慰霊など

その立地や設立経緯から、特に新・中舞鶴の寺社は多分に軍港・海軍、そしてその歴史の影響を受け、あるいは影響を与えてきた。

まずは、軍人の参拝、あるいは祈願という点からみていく。白糸浜神社に軍人の参拝が多かったことは先述の通りだが、鎮守府に近い有力神社である高倉神社や三宅神社も同様の状況であった。例えば、高倉神社では休日には水兵の参拝で賑わい、進水式などの祭祀では神職が手厚い送迎を受けた⁹⁶。また、先述の宝林寺の例のように寺院の説教の際などは、軍人の聴講者もみられた。法光寺でも、明治・大正時代に顕本法華宗の管長を務めた本多日生の信者が軍人に多かったことから、多くの軍人が参拝したという⁹⁷。

また、軍港という土地柄、弔いの面でも軍人と寺院との関わりは深い。顕著な例としては、雲門寺が挙げられる。余部下にあった雲門寺は、軍港開設により余部上への強制移転という憂き目をみた。しかしその後の歴史の中では、鎮守府付近の有力古刹であったためか、戦前から現在まで海軍及びその関係者、自衛隊との縁が深い。かつては鎮守府長官が替わるたびに、住職のもとを訪れていたそう⁹⁸。そのような事情から、戦後も、共楽公園裏の海軍墓地の慰霊法要や、海軍工廠の慰霊法要などを行い、旧海軍関係者などが訪れている。海軍墓地での戦後の海軍関係者の慰霊行事の始まりは、昭和25(1950)年の「萬霊塔」建立からとされる⁹⁹(写真28)。この慰霊塔は、復員局が建立することを連合軍に禁止されていたため、京都府仏教会東舞鶴支部が建立者となっている。昭和28(1953)年に舞鶴水交会が創立されて以降は、毎年水交会が主導となって慰霊行事が行われている。これには仏教会東舞鶴支部及び雲門寺の協力が大きい¹⁰⁰。

その他の例として、戦時中「鎮守府英霊安置所」となっていた至徳寺(資料12)は、戦病死者の奉安所とされていたほか、戦死者の名簿管理のための軍人が駐留していたという¹⁰¹。そのため、7冊の『戦没者通知名簿』など(写真29)が残されており、舞鶴海軍人事部の管轄下にあると思われる戦没者名が記載されている¹⁰²。名簿には復員局によるものも含まれているが、至徳寺は昭和20(1945)年6月に建物疎開を行っており、これ以降戦没者名の管理がどのように引き継がれたかは判然としない。ともかく、この

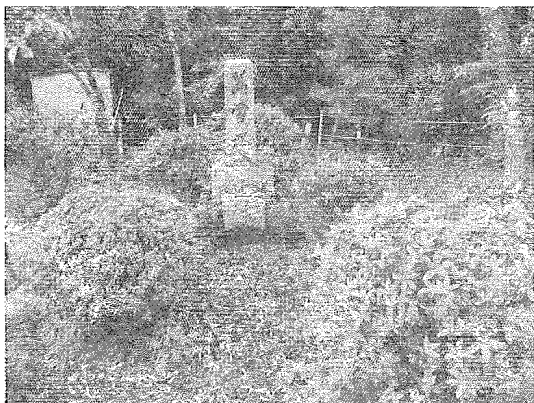


写真 28 萬靈塔
2013 年筆者撮影

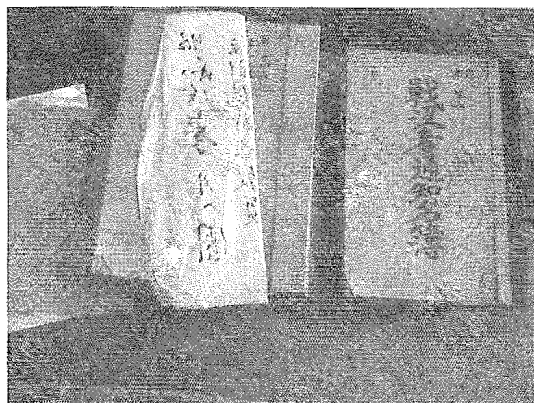


写真 29 至徳寺 戦没者通知名簿等
2013 年筆者撮影

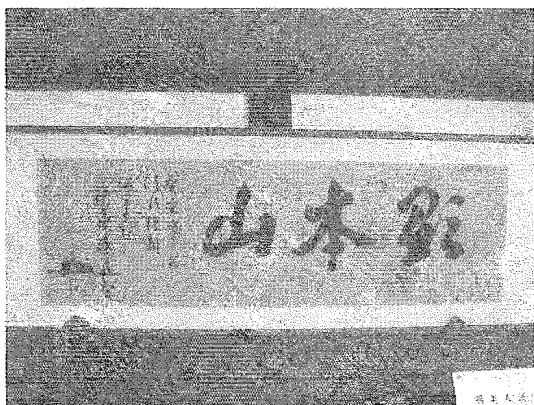


写真 30 法光寺 佐藤鐵太郎書
2013 年筆者撮影

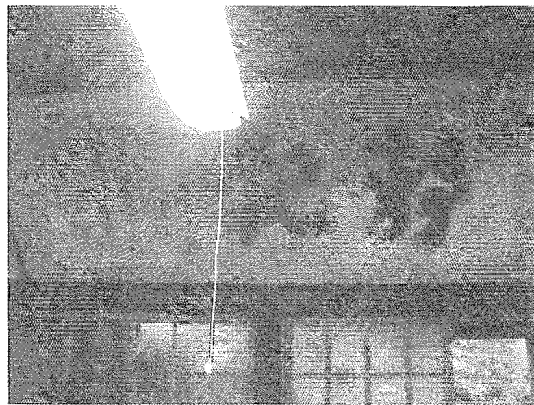


写真 31 本行寺 伊藤雫吉書
2013 年筆者撮影



写真 32 松尾寺 伊藤雫吉書
2013 年筆者撮影

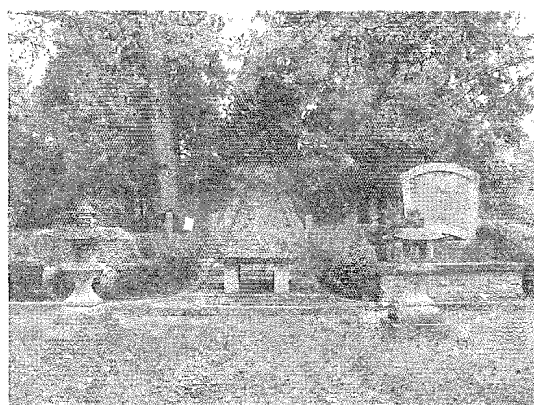


写真 33 旧彰魂碑 (右の扇形の碑)
2013 年筆者撮影

ような経緯から、かつては至徳寺で海軍関係者団体による法要が行われることがあった。先述の名簿の調査のために、空母「神鷹」¹⁰³など旧海軍関係者が訪れることもあるそうだ¹⁰⁴。また、海軍関係だけでなく、舞鶴沖で起こった浮島丸事件¹⁰⁵犠牲者の遺骨も安置されており、呉までの移送に当時の住職である堀尾祐亨が随伴した（資料12）。堀尾住職は、昭和40（1965）年の慰霊碑建立の呼びかけ人にも名を連ねている¹⁰⁶。このため、同事件の慰霊法要の場に至徳寺が選ばれたこともある。他に舞鶴に関係した事件の弔いとして、法光寺には友鶴事件¹⁰⁷犠牲者の位牌が安置されている。位牌安置の経緯は不明だが、水雷艇「友鶴」は舞鶴工作部で竣工しており、おそらくその関係かと思われる。

このような参拝・祈願・弔いなどの動きは、住居をかまえた軍人達だけでなく、一時的に入港した艦艇の軍人達にとっても同様であったと考えられる。先述したような、戦時中説教の聴衆が増加したことや、入港艦艇の祈祷や弔いなどがそれを示している。

軍人との交流

参拝や弔いなどに限らず、雲門寺の例のように、個人的な親交の形で、住職などと軍人の交わりの例もみられ、それを示す物理的なものとして、旧軍人の書がある。例えば、法光寺には、舞鶴鎮守府11代目長官であった佐藤鐵太郎の書が残されている（写真30）。佐藤は、先述した本多日生の信者であり、そのことから新舞鶴における同宗の寺院で揮毫を行った。西舞鶴の本行寺には、舞鶴出身の海軍中将・男爵である伊藤雋吉の海軍少将時代の書が残されている（写真31）。能書家であった伊藤の書は、舞鶴市内にいくつか残されており、例えば松尾寺「心霊閣」の扁額などがそうである（写真32）。

海軍・軍港の記憶

新・中舞鶴の寺院は、その創建やその後の歴史の中でやはり多くの軍港の歴史の記憶を抱える。本節では、様々な歴史を刻む石造物のうち寺社にあるものと、逸話や伝承の形で舞鶴に多くの記憶を残す東郷平八郎についてみていきたい。

雲門寺境内には、昭和8（1933）年に共楽公園に建てられた彰魂碑が、戦後招魂碑に形を変え一時的に移されていた¹⁰⁸。この碑は現在、昭和53（1978）年に旧舞鶴海軍工廠殉職者鎮魂碑の隣で、殉職者銘板をはめ込み安置されている（写真33）。ほかに慰霊に関係するものとしては、中舞鶴の真宗寺がある。当寺は、軍港建設工事の犠牲者を弔うため、明治32（1899）年に吉田組の後押しで開かれた一字を起源とする¹⁰⁹。この境内地には、伊藤雋吉書の鎮魂碑が立つ（写真34）。軍港の歴史を語るものとして、高倉神社境内には、有栖川宮熾仁親王参拝記念碑が立っている（写真35）。有栖川宮は明治22（1889）年に軍港予定地視察のために舞鶴を訪れ、このことを記念して同25（1892）年に記念碑が建立された¹¹⁰。また、本行寺の境内には明治35（1902）年に、「遊郭中」より寄進された燈籠が立つ（写真36）。本行寺の門前には、明治21（1888）年に貸座敷指定を受けた朝代遊郭が広がっていた。朝代遊郭設置には、軍港設置を見越した堀上の近藤寅太郎の尽力があったといわれる¹¹¹。この遊郭にも、海軍や陸軍軍人などが訪れていたようである。このように、軍人・職員の鎮魂・顕彰碑から、軍港建設の歴史に関わるもの、当時の遊興空間に関わるものなど様々な石造物が残されている。

数々の軍人たちの中でも、初代舞鶴鎮守府長官であった東郷平八郎は、殊に多く逸話やその名を舞鶴に残す。「あそこの道で散歩しているのをよく見かけた」など東郷に関する伝承や、東郷の名を冠したものは比較的多くみうけられる。例えば、松尾寺住職の懸空は、狩猟のためしばしば青葉山を訪れていた東郷平八郎とも昵懇であったようで、彼が東郷について読んだ漢詩が残されている¹¹²。また、かつて海軍軍人が青葉山登頂訓練を行っていたようで、戦後の海上自衛隊においても行われているそうだ¹¹³。懸空と東郷の関係については、大聖寺の山号に関する伝承にも残されている。大聖寺の山号は「鎮

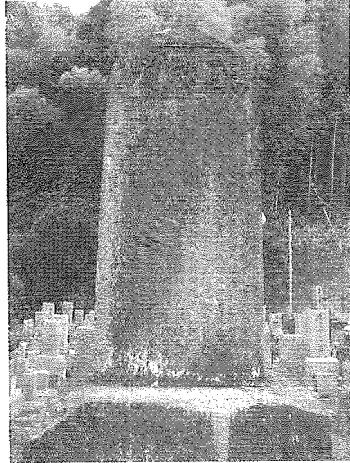


写真 34 真宗寺境内「鎮魂碑」
2013 年筆者撮影

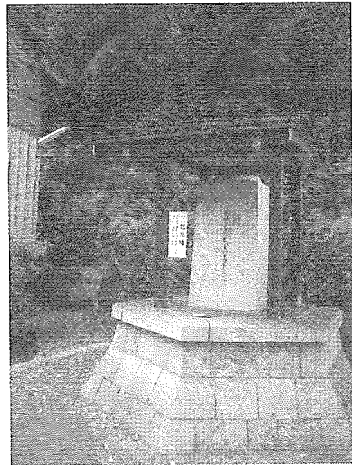


写真 35 高倉神社境内「有栖川宮熾仁親王殿下
御参拝記念」の碑
2013 年筆者撮影



写真 36 本行寺境内「遊郭中」と
刻まれた燈籠
2013 年筆者撮影

守山」といい、舞鶴鎮守府に由来するもので、懸空と東郷の縁からつけられたものであると伝えられている¹¹⁴。また、東郷の名を冠したのも残されている。三宅神社の階段は一段あたりの幅が広く、このため海軍軍人の訓練にも使われていたそう¹¹⁵。このことから、地元では「東郷階段」の通称を持つ。東郷は、歴代の舞鶴鎮守府長官の中でも、比較的地域行事に出席するなど、地域との交流を行っていたようである¹¹⁶。このことと日露戦争の名提督が街にいたという誇らしさが、舞鶴における「東郷の記憶」と関わっているのではないだろうか。

(三) キリスト教と地域社会との関わり

土地柄、特に東・中舞鶴の教会では、軍人、職工やその家族の信徒もまた多くいた。例えば、日本基督教会新舞鶴キリスト教会講義所では、大正 3 (1914) 年に将校婦人らを中心に婦人会が盛んに活動しており、同 12 (1923) 年の要港部格下げによる軍関係者の転勤が教会の維持に影響を及ぼしている¹¹⁷。赴任先での寄る辺を求めたことや、荒仕事に従事することなどから、軍人は一時的にでも訪れることが比較的多かったそう¹¹⁸。

戦中は、国家による監視の拡大や、牧師の応召などにより、妥協の時期となった。戦後は、戦前の価値観が揺らいだことやキリスト教ブームなどにより、一時的に信徒が激増した。例えば、東舞鶴聖パウロ教会では、戦前は 30 名ほどであった信徒が 80 名ほどに膨れ上がり、大門・八島通りの多くの人々が教会に通ったそう¹¹⁹。また、満身創痍で帰って来た引揚者が、食べ物を求めて教会を訪れることもあった。そのため、例えば日本基督教団東舞鶴教会では、西村直牧師により貧民救済や生き倒れの埋葬などが行われた¹²⁰。

その他、特筆すべき点としては、大正 4 (1915) 年に聖公会によって、新舞鶴幼稚園（現在のシオン幼稚園）が開かれ

ている¹²¹。これは新舞鶴町で最も早くに開かれた幼稚園である。昭和9(1934)年には多くの海軍関係者の子が通っており¹²²、現在でも若年の自衛隊員の流入が多いことから、園児の数が極端の減るということはないそうだ¹²³。

おわりに

以上、本論では、軍港都市の開設とそれによる近代都市の出現が、舞鶴の寺社をはじめとする信仰面に与えた影響をみてきた。以下に本論から得られたことを整理していきたい。

1. 軍港開設以前、各宗派の寺院密集地域は、旧城下町である舞鶴町以外に存在しなかった。そこは城下町の歴史と深く関わる空間であり、また個々の寺院においても城下町の歴史と深く関わるものであった。そのような状況であった舞鶴地方に、東・中舞鶴での軍港開設による急速な人口増加と都市化により、多くの教会所が設立され、寺院の移転が行われた。いくつかの教会所は寺院となり、かつて村の寺しか存在しなかった空間に、軍港の歴史と深く関わる各宗派の寺院密集地域が誕生した。
2. それらの寺院は軍港都市の形成・発展の中で、住民の意向に応える形で、あるいは各宗派の布教の志から、軍港特有の事情から、近隣の古刹の思惑からなど様々な要素が絡み合って設立され発展してきた。
3. 新しく形成されるものがある一方で、近代都市誕生の中で移転や消滅にさらされる古くからの寺社もあった。大幅に衰退するものがある一方、合祀されまったく新しい神社となる場合もあった。
4. 新しい街に出現した寺院は、複数本の信仰上の新しい柱となり、各地から流入した住民や、新旧の住民の新しい街における紐帯のための一要素となった。
5. 寺社の設立・移転・合祀が相次いだことで、菩提寺・氏神など旧来の地域の信仰の形にも大きな変化が起こった。
6. それぞれの寺社は、民間人だけでなく、祈願・慰霊などのため、当地における軍人達の集まる場でもあった。それは、長く居住する軍人に限らず、入港している艦艇の乗組員など、一時的に留まる軍人においても同様であった。このため、戦中など人口変動が激しい時期は、大勢の軍人が会することもあった。また、旧海軍の関係者が現在でも訪れることがある。
7. 設立経緯や土地柄などから、それぞれの寺社は、浮島丸事件などの事象、東郷平八郎などの人物といった、軍港の歴史に関する事柄と様々な関わりを持ってきた。それらは、書や石造物などの物として残っている場合もあれば、伝承として残っている場合もある。また、城下町としての歴史を持つ西舞鶴の寺院の中にも、軍港に関する記憶が残されている場合がある。
8. 教派神道やキリスト教などの動向は、古くからの都市である西舞鶴から布教が始まり、その後東へと布教が進むという場合が多かった。寺社同様、特に東・中舞鶴では軍港都市の歩みで時には発展し、時には大きく苦渋を強いられてきた。

このように、本論では、軍港開設による寺社の設立・移転、それが地域社会や軍港とどう関わってきたかなどについて、特に東・中舞鶴を中心にみてきた。

ただし、一つ留意点を挙げておきたい。すなわち、軍港の及ぼした影響を、過度に評価すべきではないという点である。確かに、新興の寺社は、その設立に軍港開設とそれによる市街地化の影響が大きく、軍港の歴史と深く関わることは事実である。古刹でも、檀家の増加や慰霊行事にその影響がみえる。しかし、寺社の発展にその関係者と住民の力が大きかったこともまた事実である。小さな布教所が、一定の檀家数を持つ寺院となるためには、その担任教師(住職)と門信徒達の努力があった。新興の神社である白糸

浜神社も、創建から百年を経て、その祭りは地域の重要な行事の一つとなっている。戦時中より戦後にかけて急速に宅地化が進んだ南舞鶴¹²⁴（東舞鶴駅以南）の彌加宜神社では、昭和28（1953）年の台風13号からの復興を願い、翌年から大名行列が始まった¹²⁵。新旧の住民が力を合わせ、現在では舞鶴の夏の風物詩となっている。

本論で取り上げた以外にも、舞鶴では多くの教会所が設立されている。中には動向を追うのが困難なものも多数あり¹²⁶、それらについては今後の課題としていきたい。

【謝辞】

本論の執筆にあたって、非常に多くの方にご助力いただきました。それらのご厚意がなければ、とても本論を書き上げることはできませんでした。ここでは個別の氏名は省略させていただきますが、ご助力いただいた全ての方々に心よりお礼申し上げます。

【注】

- 1 以上、坂根嘉弘「軍港都市と地域社会」『軍港都市史研究Ⅰ 舞鶴編』（清文堂、2010年）4～6頁。
- 2 坂根嘉弘「舞鶴軍港と地域経済の変容」『軍港都市史研究Ⅰ 舞鶴編』（清文堂、2010年）。
- 3 山神達也「近代以降の舞鶴の人口」『軍港都市史研究Ⅰ 舞鶴編』（清文堂、2010年）。
- 4 新舞鶴町は、舞鶴鎮守府開庁による周辺地域の急速な都市化に伴い、明治39（1906）年に倉梯村のうち溝尻、浜、北吸の全域と森、行永の一部を、志染村のうち市場、泉源寺の一部を合併して成立した〔舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史・通史編（中）』（舞鶴市役所、1978年）651～662頁〕。なお、倉梯村を構成するのは、森、行永、多門院、堂奥、溝尻、北吸、浜である。志染村を構成するのは、泉源寺、市場、田中、安岡、小倉、鹿原、吉坂、松尾である。二村からの分離、市街地造成に大きな負担を強いられた村民達が新市街地の繁栄に預かれない可能性があること、新旧住民の対立などから新舞鶴町誕生までには、倉梯村村長池田樞五郎の辞職など大きな紛糾があった。
- 5 例えば、西村繁三郎編『波照山得月寺と濱村』（得月寺、1991年）、瀬野祐幸編『鎮魂碑物語』（瀬野祐幸、1979年）など。
- 6 天正8（1580）年に織田信長の命により、細川幽齋が丹後国を所領としたことに始まる。本拠地を宮津に置いた幽齋は、支城として田辺（舞鶴）の地に田辺城を築城した。細川氏が豊前国に転封となった後は、京極氏、次いで牧野家が入り、十代牧野弼成の時に明治維新を迎えた。
- 7 田辺城下町の中核をなす北田辺、南田辺、松陰、京口、宮津口、大内、職人、魚屋、丹波、平野屋、本、竹屋、寺内、西、新、紺屋、引土新、朝代、引土、堀上、東吉原、西吉原の22町を合併し、明治22（1889）年に成立した（前掲4、219頁）。大正11（1922）年には、周辺の四所、高野、中筋、池内、余内の五村を吸収合併した〔舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・通史編（下）』（舞鶴市役所、1982年）460～461頁〕。本稿では、城下町の中心地であった当初の舞鶴町域を中心に確認していきたい。
- 8 村内に舞鶴鎮守府が設置され急速に都市化が進んだため、明治35（1902）年に余内村から余部上、余部下、長浜、和田が割かれ、これらが合併し余部町が成立した（前掲4、646～648）。余内村を構成するのは、福来、倉谷、天台、清道、上安、円満寺、上安久、下安久、和田、長浜、余部上、余部下であった。さらに、大正8（1919）年には、これが改称し中舞鶴町となった〔舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・通史（下）』（舞鶴市役所、1982年）438～443頁〕。町内に「舞鶴」の名を冠す施設が多く開設されてこと、兵庫県に同名村があることなどが変更理由。当初は「軍港舞鶴町」に変更する決議をしていたが、許可の見込みがなかったため「中舞鶴町」とした。
- 9 前掲4、418～429頁。土地の買い上げと強制移転は、住民にとって経済的にも精神的にも大きな負担となった。例えば、余部下では、土地を奪われた衝撃からか、元々住んでいた東の方に向かって、毎日何事かをつぶやいている老婆もいたという〔瀬野祐幸『余部下村覚え書き 第1集』（1990年復刻版）75頁〕。
- 10 山神達也「地形図と空中写真からみる東舞鶴の景観変遷」『軍港都市史研究Ⅱ 景観編』（清文堂、2012年）

- 138～139頁。
- 11 江戸時代には浜村と呼ばれ、明治22(1889)年には森、行永、多門院、堂奥、溝尻、北吸と合併し倉梯村となった(前掲4、219頁)。村内には若狭街道が走り、それに沿って東に進むと市場に達す。市場は北前船の寄港地であったことから、在郷町としての性格を持っていた(前掲10、135～136頁)。農業を中心に行っており、また冬は特産品の素麺作りを行い、天気の良い日には屋外に真っ白な素麺を干す光景が広がっていた[『舞鶴今は昔 ソーメン作りの農村から新興軍港都市へ』『舞鶴よみうり』第1号(1975年)]。
 - 12 前掲4、592～595頁。
 - 13 木船衛門府議と池田梶五郎倉梯村長が浜の地主に働きかけるなど尽力した[『舞鶴今は昔 新しい町づくりのかげに踊る利権屋とたたかう』『舞鶴よみうり』第22号(1975年)]。
 - 14 道芝通付近の地域はかつて糸谷と呼ばれ、狐狸やオオカミが出没する寂しい地域であったが、現在では道沿いに民家が並ぶ。ここへの移転は明治24(1891)年頃に完了した[『軍港建設で全戸が移転糸谷に新しい町誕生』『舞鶴よみうり』第11号(1976年)]。
 - 15 前掲4602～603頁。
 - 16 以上、戸祭武『舞鶴における近代都市の形成』『舞鶴工業高等専門学校紀要人文・社会科学』第14号(1979年)141～143頁。
 - 17 西村繁三郎編『波照山得月寺と濱村』(得月寺、1991年)92頁。
 - 18 前掲3、308～313頁。
 - 19 坂本清幸『新舞鶴町唱歌』(坂本支店、1913年)8頁、国立国会図書館デジタル化資料(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/913271>)平成25(2013年12月10)日閲覧。
 - 20 坂本清幸『余部唱歌』(坂本支店、1913年)8頁、国立国会図書館デジタル化資料(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/911612>)平成25(2013)年12月10日閲覧。
 - 21 瀬野祐幸編『余部下村覚え書き 第一集』(瀬野祐幸、1971年)11頁。
 - 22 現在の余部下の市街地部分は、当時まだ田畑であった(前掲21)。
 - 23 舞鶴海軍工廠以降、飯野産業舞鶴造船所、飯野重工業、日立造船傘下の舞鶴重工業、日立造船舞鶴工場、ユニバーサル造船舞鶴事業所、ジャパンマリンユナイテッド舞鶴事業所と変遷。
 - 24 前掲15。
 - 25 以上、前掲16、144～145頁。
 - 26 前掲20、4頁。
 - 27 『寺院明細帳』(1884年)、京都府立総合資料館所蔵。
 - 28 臨濟宗及び曹洞宗が初期の伝播状況については、鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・通史編(上)』(舞鶴市役所、1993年)521～532頁に詳しい。
 - 29 真下八雄「近世寺院の成立—曹洞宗桂林寺の本末制度について(その一)」『舞鶴地方史研究』第43号(2012年)12～17頁。
 - 30 前掲28、328～331頁。
 - 31 舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・史料編』(舞鶴市役所、1973年)51頁。
 - 32 前掲31。
 - 33 開山明誓は、幽齋の子茶智丸の師であり、幽齋の妹を妻とし、細川氏の九曜紋を寺紋とした[前掲31、26頁]。また、瑞光寺楠文範氏によれば、田辺城の出城的役割を想定した立地にあるという。
 - 34 現在の見樹寺の位置に、かつては京極氏の菩提寺瑞泰寺があったが、京極氏の転封により豊岡へ移転した。その後、牧野氏転封により、寛文年間に千葉の関宿より移転[『松本節子の舞鶴・文化財めぐり』223『舞鶴市民新聞』第436号(1990年)]。
 - 35 慶長6(1601)年に京極高知の家臣前波九右衛門に請われ、上安久から現在地に移転[京都府舞鶴町役場『舞鶴』(京都府舞鶴町役場、1932年)46～47頁]。
 - 36 前掲35、32頁。
 - 37 今回は論題の関係上、このような分類を行った。他の分類として、例えば「松本節子の舞鶴・文化財めぐり」215『舞鶴市民新聞』(1990年)では次のように分類を行っている。

1. 古代信仰にその根をもつもの。
 2. 平安時代初めの密教伝播によるもの。
 3. 鎌倉仏教の台頭によるもの。
 4. 南北朝動乱期の修験寺の性格をもつもの。
 5. 近世初頭の細川氏、京極氏、牧野氏などの政権にかかわって開山されたもの。
 6. 明治以降、海軍を中心とする人びとの移動に伴ってこの地に根づいたもの。
- 38 前掲 19、6 頁。
- 39 『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』（1923 年）、京都府立総合資料館所蔵。
- 40 前者は秋津洲通敷島所在、後者は八条通八島南入所在となっている。なお、真宗高田派清福寺出張所（一条通大門北入）が三宝寺の起源となる教会所と思われる。高柴貞雄編『新舞鶴案内記』（新舞鶴案内編纂會、1911 年）29 頁。
- 41 新舞鶴町編『新舞鶴町治一斑』（新舞鶴町、1916 年）41 頁、国立国会図書館デジタル化資料（<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904940>）平成 25（2013）年 12 月 10 日閲覧。なお、前掲 40 にはみられず、この史料にはみられる曹洞宗布教所（六条通富士角）が祥雲寺の前身と思われる。
- 42 ただし、至徳寺の前身となる教会所は明治 40（1907）年から、宝林寺の前身となる教会所も届け出の少し前から活動自体は行っていたようである（至徳寺堀尾祐真氏及び宝林寺稲田尚氏への聞き取り）。
- 43 前掲 39。
- 44 前掲 27。
- 45 資料 4 及び法光寺桑村信慶氏への聞き取り。
- 46 三浦は「字長浜ニアル西洋館建ヲ奥母通ニ移シ現代式ノ布教ヲナサン」としていたようで、現在の明教寺の本堂は西洋風の建物となっている〔舞鶴海軍工廠堀内中佐『工廠附近に在る神様仏様の由緒（一）』（1919 年）22 頁〕。移転に際しては、飯野商会の協力が大きい。飯野商会が長浜で労働者のために経営していたモダンな外観の風呂屋の建物を解体し、その一部が明教寺の移転先での本堂新築に活用された〔「松本節子の舞鶴文化財めぐり」512『舞鶴市民新聞』第 1155 号（1997 年）〕。
- 47 明教寺谷公人氏への聞き取り。
- 48 『寺院規則（宗教団体）制定ノ件』（1942 年）、京都府立総合資料館所蔵。
- 49 瑞光寺楠文範氏への聞き取り。
- 50 堀尾大悟「雲門寺移築百年史」『普國師と雲門寺』（雲門寺、1987 年）3 頁。
- 51 伝平安時代初期開創。かつては大寺院であったとされるが、慶長 5（1600）年の戦火により衰退した（舞鶴海軍工廠堀内中佐『工廠附近に在る神様仏様の由緒（一）』（1919 年）18～20 頁）。明治時代に、松尾寺の懸空により復興する〔「開山千三百年西国二十九番札所松尾寺」（青葉山松尾寺、2008 年）15 頁〕。
- 52 「松本節子の舞鶴・文化財めぐり」395『舞鶴市民新聞』第 850 号（1994 年）。
- 53 京都府立総合資料館編『京都府百年の年表 六宗教編』（京都府、1970 年）33～34 頁。
- 54 旧北会編『北吸邑』（旧北会、1999 年）41 頁。
- 55 前掲 39 及び各年の『教会』（京都府立総合資料館所蔵）簿冊及び聞き取り。
- 56 宝林寺稲田尚氏への聞き取り。
- 57 法光寺桑村信慶氏への聞き取り。
- 58 以上、資料 10 及び東浄土寺山口憲文氏への聞き取り。
- 59 前掲 39 及び妙法寺木村泰雅氏への聞き取り。
- 60 前掲 39。また、桂林寺境内には、大正 15（1926）年 4 月に昼間の中学校での就学困難者のために、夜間中等教育機関の「舞鶴研修学院」が設立されるなど、教育方面の活動も行っていた。昭和 24（1949）年 3 月の閉鎖までに 2500 人が卒業している〔舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・各説編』（舞鶴市役所、1975 年）285 頁〕。
- 61 河川、堀、土居と共に城下の防衛の役割を果たした。以上、前掲 28、606 頁。
- 62 複合的な「境内」を形成していた寺社が、近世権力による検知や移転などで解体・再編されて成立した寺町は、中世から近世への都市変化を象徴的に示す〔高橋康夫ほか編『図集 日本都市史』（東京大学出版会、1993

- 年) 13頁]。
- 63 前掲 28、637～640 頁。
- 64 日宗寺布目潮崇氏への聞き取り。
- 65 以上、村松俊夫『舞鶴ふるさとのやしろ』(村松俊夫、1992 年) 104～105 頁。
- 66 舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・各説編』(舞鶴市役所、1975 年) 380～381 頁。
- 67 やまかげ編集部編『やまかげ』(天理教山陰大教会、2012 年) 1～2 頁。
- 68 例えば、新舞鶴教会(浜)大正 12(1923)年設立、丹鶴教会(余部下)大正 15(1926)年設立など。
- 69 前掲 67、4～6 頁。
- 70 前掲 67、7～8 頁。
- 71 以上、樋口安蔵『舞鶴カトリック教会沿革史』(1974 年) 29 頁。
- 72 カトリック東舞鶴教会中山誠氏への聞き取り。
- 73 以上、前掲 51、143～144 頁、151～152 頁。
- 74 『教会 昭和三年』(1928 年)、京都府立総合資料館所蔵。
- 75 以上、『東舞鶴教会創立五十周年記念誌』(日本基督教団東舞鶴教会、1985 年) 69～71 頁。
- 76 以上、西舞鶴教会三十周年記念誌編集委員会編『日本イエス・キリスト教団西舞鶴教会 創立三十周年記念誌』(日本イエス・キリスト教団西舞鶴教会、1982 年) 1～7・16～18 頁。
- 77 以上、日本イエス・キリスト教団舞鶴福音教会高橋頼男氏への聞き取り及び受贈資料。戦時中、中舞鶴にあった教会の長島幸雄牧師は、西舞鶴の民家で行われていた集会にも訪れていたが、彼の応召によりこの集会も中断となった(前掲 762 頁)。
- 78 日本基督教団東舞鶴教会川崎一路氏への聞き取り。なお、ホーリネス教会の流れを汲む聖イエス会の教会が上安に存在する[京都府総務部文教課編『京都府宗教法人名簿』(京都府総務部文教課、2007 年)]。
- 79 前掲 17、68～69 頁。得月寺の檀家数は、明治 17(1884)年の 102 名であったものが、昭和 9(1934)年には 250 名まで増加している。
- 80 前掲 56。
- 81 ただし、瑞光寺では昭和 7(1932)年に 300 戸ほどであった門徒数が、終戦時には 800 戸まで増加しており、西舞鶴でも若干門信徒数増加の話を確認出来た(前掲 49)。
- 82 至徳寺堀尾祐真氏への聞き取り及び前掲 47 及び前掲 56 及び前掲 57 及び前掲 64。
- 83 余談になるが、西舞鶴の瑞光寺開創明誓は、細川幽齋と強い関わりを持っており、その創建は幽齋の思惑も多分に影響している。幽齋の思惑の一つとして、近江や北陸の真宗門徒の商人達を城下に集めたいというものがあった。そのために、真宗門徒が集まる場が必要となり、これが瑞光寺開創の一因になったといわれる[加藤晃「ぶらり城下町一二～瑞光寺のはじまり」『舞鶴市民新聞』(2007 年)]。設立の経緯は違えども、新興地における宗教的紐帯の場という点では類似性がみられる。
- 84 井上淺治郎編『京都府加佐郡新舞鶴町元濱區沿革史』(井上淺治郎、1932 年) 9・13・21・27・29・35 頁。
- 85 前掲 17、72～77 頁。
- 86 また、より古くには周辺も含む倉橋郷一帯の総鎮守であったとする説もある[谷川健一編『日本の神々―神社と聖地第七卷山陰』(白水社、1985 年) 447 頁]。また、明治期までは、森、行永、浜、溝尻四村の神興、振物、競馬のある近郷最大の例祭が行われていた[式内社研究會『式内社調査報告第一八卷山陰道一』(皇學館大學出版部、1984 年) 343 頁]。
- 87 前掲 17、102～103 頁。
- 88 前掲舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史・通史編(下)』(舞鶴市役所、1982 年) 531～532・619・685～686 頁。
- 89 白糸浜神社坂根章氏及び岩室稲荷神社森本太郎夫氏への聞き取り。また、現在の岩室稲荷神社宮司の祖父が、戦前白糸浜神社も兼務していたことから、岩室稲荷神社に軍人の祈祷関係の資料が多く残る。
- 90 『舞鶴よみうり』第 45 号(1978 年)。
- 91 前掲 65、14 頁。
- 92 白糸浜神社坂根章氏への聞き取り。

- 93 前掲 54、5 頁。
- 94 三宅神社奥田昭武氏への聞き取り。
- 95 前掲 94。
- 96 橋本一哉『遠い夏の記憶』(文芸社、2001 年) 223～224 頁。
- 97 前掲 57。
- 98 雲門寺堀尾大直氏への聞き取り。
- 99 平成元(1989)年 10 月 26 日齋行『舞鶴鎮守府大東亜戦争戦没者之碑』除幕式・慰霊祭での舞鶴水交會会長の慰霊の詞。
- 100 舞鶴水交會編『三〇年のあゆみ』(舞鶴水交會、1983 年) 10 頁。
- 101 至徳寺堀尾祐真氏への聞き取り。
- 102 所轄、戦没年月日、戦没区分、戦没場所、本籍地、現住所、官職、氏名が記されているほか、遺族、入籍番号、記事が記されている場合もある。昭和 16(1941)年 12 月 28 日公表～昭和 29(1954)年 12 月 15 日公表の情報までが、7 冊に渡って記載されている。昭和 20(1945)年 11 月 30 日公表分までは舞鶴海軍人事部によるものと思われ、以降は舞鶴地方復員人事部、舞鶴地方復員局人事部、舞鶴地方復員局残務処理部人事務課、舞鶴地方復員残務処理部復員事務課、舞鶴地方復員残務処理部によるものとなっている。なお、所々欠落部分を補うためか、戦中でも舞鶴地方復員残務処理部の用紙が使われている。
- 103 「神鷹」はドイツ商船「シャルンホルスト」を改造した日本海軍の航空母艦である。主に船団護衛の任務に従事していたが、昭和 19(1944)年 11 月 17 日に済州島沖で米潜水艦に撃沈され、乗組員のほとんどが犠牲となった〔片桐大自『聯合艦隊艦銘伝』(光人社、2003 年) 173 頁〕。
- 104 前掲 101。
- 105 昭和 20(1945)年 8 月 24 日、大湊から朝鮮へ向かう海軍特設輸送船「浮島丸」が舞鶴湾内下佐波賀沖にさしかかった時、突然爆沈した事件。犠牲者には、戦中徴用されていた朝鮮人とその家族が多くいた。乗船していた 3735 名中、549 名が亡くなった〔舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史・現代編』(舞鶴市役所、1988 年) 113～118 頁〕。
- 106 浮島丸殉難者追悼実行委員会編『浮島丸事件の記録』(かもがわ出版、1989 年) 78 頁。
- 107 昭和 9(1934)年 3 月 12 日、佐世保港外での演習の帰路、水雷艇「友鶴」が転覆した事件。ロンドン海軍軍縮条約の制限外であった 600 トン未満の艦艇に、過剰な武装を施した結果、復元力を失い事故につながった。「友鶴」は千鳥型水雷艇三番艇で同年 2 月 24 日に舞鶴工作部で竣工したばかりであった〔前掲 103、493～496 頁〕。
- 108 瀬野祐幸編『鎮魂碑物語』(瀬野祐幸、1979 年) 22 頁。
- 109 前掲 4、582～583 頁。
- 110 瀬野祐幸編『碑とその語るもの』(瀬野祐幸、1975 年) 15 頁。
- 111 伊賀一清『故里の小咄』(伊賀一清)
- 112 『開山千三百年西国二十九番札所松尾寺』(青葉山松尾寺、2008 年) 15 頁。
- 113 松尾寺松尾心空氏への聞き取り。
- 114 大聖寺松尾眞弘氏への聞き取り。
- 115 前掲 94。
- 116 戸祭武『舞鶴と東郷平八郎』(北都新聞社、2005 年) 27～28 頁。
- 117 前掲 75。
- 118 日本基督教団東舞鶴教会川崎一路氏への聞き取り。
- 119 日本聖公会東舞鶴聖パウロ教会柚取賢一氏への聞き取り。また、舞鶴福音教会の前身となる南浜町の教会でも、戦後活発な伝道が行われた(舞鶴福音教会受贈資料)。
- 120 前掲 118。
- 121 『シオン幼稚園創立七〇周年記念誌』(シオン幼稚園七〇周年記念誌編集委員会、1998 年) 14 頁。
- 122 前掲 121、22 頁。
- 123 前掲 82。

124 南舞鶴では、1930年代の軍拡や東舞鶴市誕生などにより、海軍関連の住宅建造や区画整理が進んだ。また、退職した海軍の准士官や下士官が退職後に定住して、地域の開発に協力する例も多かった。戦時中の行永は、土着の人が3分の1、土着以外の職工が3分の1、軍人が3分の1という状況であった〔「海軍工廠が変えた村の経済技師・技手・組長がぞくぞく」『舞鶴市民新聞』第9号（1975年）〕。

125 彌加宜神社田中國雄氏への聞き取り。

126 例えば、『教会 昭和七年』（1933年）から、昭和6（1932）年12月24日に真言宗醍醐派中舞鶴教会所の設立許可が出ていることが分かるが、その後の動向は不明である。また、前掲91、『郷土調査（昭六）』（中舞鶴尋常高等小学校、1931年）、加藤晃氏への聞き取りから、大本の教会所の存在が確認出来るが、その動向については不明である。

<資料編>

【資料1】『新舞鶴唱歌』作詞一坂本清幸 作曲一佐野国盛

出典：『新舞鶴唱歌』（坂本支店、1913年）国立国会図書館デジタル化資料（<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/913271>）

- 1 日出づ扶桑馬耳の峰 艦に起れる「君が代」の 奏で尊く大空に しづつ揚ぐる軍艦旗
- 2 吹く潮風に晴れ渡る 桃山あたり朝霞 新舞鶴を巡らばや 汽車の煙を後に見て
- 3 店々てらふ三條の 夏の夜毎の不夜の景 殊に海軍記念日の 賑ひ實にや如何ばかり
- 4 大門通りの最ながく 六十尺の道の幅 稲荷の鳥居くぐり来て 詣づ木影の蛭子宮
- 5 鮎に名ある與保呂川 築守の唄のごかなり 萬代橋の夕涼み 倚る欄干や月の影
- 6 流れて盡きぬ祖母谷川 名誉は永き千歳橋 有志の偉勳きざまる 紀功碑たかく仰ぎけり
- 7 掃海あるは夜襲にて 日露の後に斃れしと 綴る片岡中将の 碑文を讀むさへ胸躍る
- 8 藁を結びし鬼人形 作りて祭る貴布禰宮 拝して更に賽せばや 三宅、八幡、水無月社
- 9 宇佐大神ぞ祀らる 浮島の樹々若葉して 翔る鷗の三羽五羽 岸に砕くる涙白し
- 10 柳しだるる擬寶珠の 白糸橋に佇めば 電燈會社の煙筒の 黒煙ひろでる空青し
- 11 得月院や鏡智院 清光院に杖曳かば 神道、仏教、耶蘇教の 教會所をも訪れ寄らん
- 12 夕日を浴びし愛宕山 四面山上そびへつる 碑石に題す忠魂の 文字は東郷大将書
- 13 盡す奉公婦人會 加佐郡、東部、戦死者の 英魂祀る眞心は 栽うる楓の紅に染む
- 14 巡りし市街は黄昏て 眼下に廣し高薨 軍港あらね其の昔の 村の面影いま何處
- 15 官衙、學校そなはりて あまた銀行、會社あり 我が鎮守府の補佐を爲し 榮行く町の雄々しさよ

【資料2】『餘部唱歌』作詞一坂本清幸、作曲一佐野国盛

出典：『餘部唱歌』（坂本支店、1913年）国立国会図書館デジタル化資料（<http://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/911612>）

- 1 鷲の羽風に掻き曇る 雲ものすごき西比利亞の 涛うち寄せて岸に吠え 夢は醒めけり裏日本
肝付大佐建議して 仁禮中将艦を馳せ 舞鶴湾を視察せり 維時、明治十九年
測れば深し灣の底 仰げば高し四圍の山 軍港おくに類なき 良き港ぞと称えける
餘部始め長濱や 北吸の村ことごとく 買ひ上げの命くだりけり 實に八十餘萬坪
二十二年の冬たちて 民家早くも移りしが 建築支部の置かれしは 七星霜の後なりき
始められけり大工事 数多の労役者の集ふにぞ 田を埋め畑に石場つき 建て急ぐ家かず知れず
三十五年六月に 山裾せまる樋の底の 餘部町は成りにけり 晝かば鍵の形せん
戸数は二千四百餘戸 人口一萬一千餘 いざ我が友よ連れだちて 来れ町をば案内せん

- 2 並ぶ柳に霧こむる 本町通り朝まだき 数千戸の職工の 工廠さして急ぎ行く
龍珠を秘むる雲門寺 山手の扉を指差しつ 花木通りを男生徒 通ふや第二小学校
日々労働の余暇のを以て 工業補習学校に 通ふ職工四百名 学徳みがく頼しさ
街路は廣し十二間 憲兵分隊若宮社 恵比寿神社を眺めつゝ 向ふや榎隧道に
伊藤海軍中將の 題字を刻む鎮魂碑 流れも細き榎川 悲しき由緒かたるらん
- 3 町役場や巡査出張所 郵便局や諸銀行 会社病院とひ盡くし 詣づ旭の妙見堂
鳥居かすめる山腹の 稲荷の宮を後にして 第一校を訪ひ寄らば 学ぶ女生徒かず多し
遊泳客に打ち連れて 曲がれば見ゆる灣の景 名も長濱の潮きよく 泳ぐや松の影すずし
拜す高倉八幡宮 青葉風を身に浴びて 鞍掛石に付めば 木の間ぬひ行く軍艦
- 4 隧道ぬけて眺むれば はるか加津良の町の棟 桃さき誇る山の上に 機関部員の戦死の碑
汽船の波の飛沫ちる 岸邊あゆめば和田の里 竿を納めし釣人の みかん購めて帰途に着く
眼病む人の祈願せる 佛たふとき長江寺 普明国師が棄て杖の 枝根生ぜし櫻あり
- 5 十年あまりの其の昔 家わづかなる村里の すがた何處に残るらん 巡りし今日の追懷や
六十餘州國々の 人つどひ来て朝夕に 己が業務を励むにぞ 活気、街に溢れけり
此處に学べる生徒等よ 海に陸に大空に 卿等の腕を試すべき 事業は多し、いざゝらば
志気を養ひ體を練り 学びの道にいそしみて 日出づる國の名に恥ぢず 進取の民と成れよかし

【資料3】「開山 船木日圓上人略縁起」(本告寺所蔵)

師は山口県萩の産にして先祖代々毛利藩の家臣たり
八歳より十三歳に至るまで天狗につまゝれ京都比叡山の深山に入り法術
を習い父の跡を継ぎ武士となるも武友の濡れ衣により殿さまのお手打ち
となるも殿の慈悲により峯打にて釈放され売薬行商を営む
然るに薬は少しも売れず天狗のお告げあり「是好良薬」の薬と間違えている
のではないかと悟る所あり諸国を行脚し修行を積み此の土地に止まり靈験により
八大龍王を守護神として祀りたるは明治の初期なり八大龍神の靈験あらたかなる
故を以て遠近各地より参詣人門前市をなすの賑いなり堂宇を整備し「立正教
会」を創立す、京都大本山妙顕寺貫主河合辰猥下と信交厚く猥下も
再三当山に御親教され当山の基礎を益々固むるも老令の故を以て昭和三年
二月十七日迁化され後住として和田日良師本山特合住職として派遣され
開基上人となる歴代住職たる者光師の高徳を偲び報恩感謝の
法□言上怠るべからず

【資料4】「法光慶讃文」(法光寺所蔵)

慶讃文
□□勸請本門寿量本尊南無久遠家成大見教之釋迦牟尼
佛南無逢大聖人拳來臨影郷音知見照覽アラセ給へ維持大
正十四年四月櫻花爛漫ノ□恭シリ新舞鶴ヶ顯本山信行寺開
堂供養ノ式典ヲ挙行ス抑モ当山ハ明治四十一年ニ故桑村儀俊
同志ノ信徒ヲ結束シテ信行會ヲ創立シ會員百五十ヲ超ヘ迹ニ現在
ノ地ニ教會所ヲ建設セシニ発ス爾來僧俗力ヲ併セテ教勢ノ發揚
ニ從ヒ法燈日ニ悍キシガ偶ニ故儀俊ノ次子常信亦タ出家シテ北海道
札幌ノ顯本寺ニ在リ大正十年一月顯本寺ガ寺担ヲ拳ゲテ我顯本法

華宗ニ帰依スルヤ常信ハコト未曾有ノ盛儀ニ際会シテ我宗ノ教義ヲ
礼受シ、又顕本寺帰依改宗ノ状況ニ感激シテ心ニ決心スル處
アリ直チニ家郷ニ歸リテ父儀俊ヲ説ク儀俊ハ常信ノ言ニ□□信
徒故西野嘉左衛門ト計リテ大事ヲ決心ス逐ニ大正十年四月
十五日ヲ以テ教會處ニ屬ノ信徒一同ヲ將率ヒテ莊嚴ナル改宗ノ式
典ヲ挙グ及ビ信行会ニ代エルニ統一団新舞鶴支部ヲ設置シ、時
ノ舞鶴鎮守府司令長官佐藤海軍中將モ随喜年列シ盛大ナル
発会式ヲ挙ゲタリ□大正十二年四月名古屋常樂寺ノ建物ヲ移シ
テ本堂ヲ建立シ新タニ顕本山信行寺ト号ス。夫レ以レバ正法ノ隆
盛ハ国家安泰ノ基タルコト誰人ガ之ヲ信ゼザルモノヤアル故ヲ以テ佛教ニハ説
テ国□□堂□□□莊嚴ト説キ給ヒ宗祖大聖人亦タ夫レ国ハ法ニ
依テ□□ハ法ハ人ニ因テ貴シト回リ、今ヨリ当新舞鶴町モ寂光浄土ヲ
出現シ成□□ノ正義ノ信徒ヲ化シ更ニ長ヘニ大法ノ□□ハ四方ニ響キ
億万ノ群類ヲ濟度スルノ道□□トナランコト疑ヒナカルベシ依慶讚文
如件

大正十四年四月十四日

顕本法華宗管長

大僧正 本多日生

【資料 5】「鏡智院移転御願」（大聖寺所蔵）

明治参拾五年参月拾三日京都府加佐郡志楽村長 森本庄右エ門

明治参拾五年参月拾五日加佐郡倉梯村村長池田梶五郎

寺院移転御願

京都府丹後国加佐郡志楽村字松尾

真言宗醍醐派松尾寺末寺 鏡智院

右ハ近来大破ニ及ヒ此儘ニ差置候時ハ頽廢可致ニ付深
ク苦慮罷在矣処今般布教ノ都合有之同国同郡新市街倉
梯村字北吸字糸へ移転仕度尤モ該地方ニハ数多ノ信
徒モ有之移転ノ地所及費用ハ勿論維持資本等別紙之通
寄付者有之永世維持ノ目途相立矣間右御許容被成下度
依テ図面及予算書永續方法書明細帳相添關係人連署ヲ
以テ此段奉願矣也

右寺住職

明治卅五年三月一日 教師試補 松尾一空

右寺法類全郡西大浦村字多禰寺西藏院住職

松尾本觀

右寺信徒總代全郡志楽村字松尾卅番戸平民

仲西新兵衛

全 全郡全村全字二拾四番戸平民

福井傳藏

全 全郡全村全字拾四番戸平民

山崎伊右エ門

全 全郡倉梯村字北吸四拾六番戸平民

山崎弥作

全 全郡全村全字三拾壹番戸平民
瀬川治右エ門
全 全郡全村全字四拾三番戸平民
山崎八重藏
右寺本寺全郡志楽村字松尾
松尾寺住職
少僧正 松尾懸空

京都府知事大森鐘一殿

【資料6】「本願寺説教所関係資料（宝林寺）」

出典：出典：『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』1923年、京都府立総合資料館所蔵

当新舞鶴町ノ起源ハ明治三十四年ヨリ舞鶴軍港設置サレテ以来急激ノ人口増加ニ依リテ置カレタル新市街ナリ前ハ字浜ト称スル一部落ニシテ一宗派ノ教会所ヲ以テ事足リルモ人口増加ニ伴ヒ真宗本願寺派ノ信徒亦多ク必然的之ガ必要ヲ感ズルニ至レリ之加舞鶴鎮守府ヨリ特ニ本派本願寺派ノ布教ヲ以来シタルニ付本願寺ニ於ヒテモ此ノ請ニ応シ亦一般住民ノ思想善導ノ為メニ当地ニ教会所設立ノ必要認メタルモノナリ

【資料7】「中舞鶴説教所（明教寺）関係資料」

出典：出典：『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』1923年、京都府立総合資料館所蔵

設立ヲ要スル理由

- イ 新井軍港地ナル故真宗門信徒ノ移住者多キタメ
- ロ 真宗本願寺門徒信者其他ノ求教耳法上ノ便易ノタメ
- ハ 中舞鶴ハ新井地ニシテ従来ヨリノ真宗寺院ナク且ツ同宗派寺院設立地ト遠隔ナルカタメ
- ニ 輓近者シク□□要□シ来リタルハ洵ニ憂慮ニ堪ヘス之カ融和ヲハカルハ現下ニ努ナルカ故ニ□□相人善導民心振興ニ資センカタメ

【資料8】「立正教会（本告寺）関係資料」

出典：出典：『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』1923年、京都府立総合資料館所蔵

存続ヲ要スル理由

当中舞鶴町ハ戸数三千ヲ超ヘ新興市街ニシ急激ノ発展ヲ来セル関係上往昔ヨリノ寺院ニ乏ク現在トシテモ日蓮宗寺院ハ皆無ニシテ唯当教会所を以テ教義ノ弘通信仰ノ道場トシテ唯一ノモノタリ町住民ハ勿論舞鶴要港部関係諸員ノ為現存スルモノニシテ町ノ中央ニ位シ参拜ニ便ニ土地高操四円ノ状況ハ信仰ノ対象トシテ真ニ精神上ニ宜シク常ニ二名ノ僧在リテ専ラ之ニ担ル他ニ遠ク町端ニ位置シテ一教会所最近新設サレシモ常住ノ僧ナク堂宇手狭ニシテ位置ノ関係上接続村落ノ信徒ヲ重トシ信徒布教ハ全然当教会所ト異ナリ当中舞鶴町トシテハ当教会所ハ益々其ノ存続必要トス

【資料 9】「曹洞宗新舞鶴布教所（祥雲寺）関連資料」

出典：『神佛道教会所現存届 丹後ノ部』1923年、京都府立総合資料館所蔵

設立ヲ要スル事由

当新舞鶴町ハ明治三十四年鎮守府開庁以來頓ニ開ケ現在戸数三千ヲ超エ人口亦一万以上ヲ数ヘ已ニ新市街ヲ為セシヨリニ二十年来未ダ曹洞宗寺院一ヶ寺モナク教会所ノ如キモノ一ヶ所モナク然ルニ曹洞宗信者ナルモノ其率ニ於テ大多数ヲモツヲ充サル茲ニ於テ同宗檀信徒ノ安心立命ヲ画シ引イテハ消極的事作ノ便益ヲ計リ以テ民心ヲ善導スルノ挙ニ出タルモノ也

設立費及支弁方法

已ニ明治三十四年同府同郡由良村松原寺前住職塩見覚循軍隊布教シトシテ当地ニ駐錫シ茲ニ當場ヲ經營シテ百余坪ノ地面ニ二十四坪ノ堂宇ヲ建立セシモ約八、九年ヲ経テ同氏ノ維持經營困難トナリ行方不明ノ状態トナル其後数人担任教師其任ニ当ル大正六年六月ニ至リ一般信者ノ特志ニヨリ寺内ノ空地ニ約十坪ノ大師堂ナルモノヲ建立ス大正九年七月ニ至リ拙衲後繼シテ其任ニ当リ大正十一年五月町民一般ノ不便ヲ感ジ納骨堂ヲ建立シ爾來長呈ノ進歩ヲナシツ、現状ヲ示セリ然レ共設立当時ノ記録等一切不明ニシテ設立セシ当人モ行方不詳ナリ依テ設立費及支弁方法等現在詮スルニ速ブル難シ

【資料 10】「新舞鶴教会所（東浄土寺）名称変更申請理由」（東浄土寺所蔵）

理由書

今回申請の「新舞鶴教会所」昭和拾年参月壹日より當時浄土宗舞鶴方面布教員として中島隆政上人が布教に従事昭和拾壹年貳月拾八日舞鶴市字新壹百参番地浄土寺住職中島隆善正開山とし浄土宗新舞鶴教会所を設立中島隆政上人初代主管者と成り鋭意布教々化に盡力しも次第に増加戦時中は一層發展を期し信徒数も壹百貳戸に達したるも終戦と共に軍港都市なる為住民の移転激しく信徒数半減したるも其の後安定す

昭和貳拾四年五月貳日初代主管者中島隆政上人師籍舞鶴市字新壹百参番地浄土寺主管者に就任せし為後任として現任者山口憲定就任以來宗門興隆布教教化に努力せし処その後信徒の数も追々増加し信徒の関心も深まり境内地の買取墓地新設等の事業も為し得たり

尚當地域には新舞鶴教会所の名称を持ちたる他宗派寺院他宗教の教会ある為間違はるるもあり相當の利割もあり不便も感じます故に寺号を公称し浄土宗寺院たるを一目瞭全たらしめ今後の浄土宗興隆の為盡力致し度き念願を以つて名称変更の申請書を提出致します所以であります

昭和参拾貳年参月 日

申請人 住所舞鶴市濱八百参拾八番地
新舞鶴教会所代表役員山口憲定

【資料 11】「高倉神社郷社昇進に関する資料」（1944年9月1日付〔提出自体は前年カ〕、高倉神社所蔵）

昇格ニ関スル調書

（略）

社格社名 指定村社 高倉神社

（略）

当社兼務森村彌加宜神社

祠掌 田中照海

右社氏子総代

長濱村 江上廣藏
和田村 堀口庄左衛門
下安久村 濱田市左衛門
餘部下村 布川範兵衛
餘部上村 井上喜右衛門
北吸村 前田孟十郎
右村戸長 安久左衛門

【資料 12】「至徳寺堀尾祐亨氏弔辞」（至徳寺所蔵）

（略）

当市も軍港都市に拡充されて参りまして人口も急増しつつあった昭和十年三月現在地に堂宇を建立し大願業力のある主として仏法も足で聞くべきものであることに粉骨碎身して来られました 支那事変大東亜戦と戦線を拡大するに及び鎮守府英霊安置所に指定され管下戦病没者の奉安所として終戦まで海軍合同葬にと奉任の誠を捧げてこられました 然るところ本土空襲が激しくなるに従って家屋強制疎開に遭い終戦直前の六月に本堂取毀しの憂き目を見るに至りました

（略）

戦時中には中国人犠牲者の冥福を祈って安置し戦後その遺骨送還の奉仕作業に加わり神戸港まで移送又当舞鶴港より遺骨送還のため興安丸の移送に当られました

舞鶴港で機雷に触れ爆沈した浮島丸の朝鮮人遺骨の安置に更には海路呉まで移送の奉任団長を勤められたことその他関係者の追悼法要を執行されたこと

時には奏任官待遇に遇せられ海軍刑務所の教誨師として奉職されたこと等々その功績は枚挙にいとまのない程であり

（略）

昭和五十八年二月十六日

真宗大谷派至徳寺

責任役員 野村正秋

表紙の解説

	1	2	3
5		4	
(裏)		(表)	

- 1 舞鶴市堂奥地区現地調査成果報告会 (2015.3.1)
- 2 雲門寺 (舞鶴市余部上)
- 3 舞鶴幼稚園 130 周年記念展示 (2014.11.1)
- 4 五老岳から望む冬の舞鶴湾 (2015) 松岡秀雄氏撮影
- 5 山口神社 (舞鶴市堂奥、2015) 新谷一幸氏撮影

京都府立大学文化遺産叢書 (2008 ～)

- 1 南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
- 2 近世伊予越智島地域における流動する人・物・情報
—御用日記・諸願控の総合的研究—
- 3 八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図—地域文化遺産の情報化—
- 4 八幡地域の古文書・石造物・景観—地域文化遺産の情報化—
- 5 丹後・宮津の街道と信仰
- 6 城陽市域の地域文化遺産—神社・街道の文化遺産と景観—
- 7 熊野の信仰と景観—宗教遺産学の試み—
- 8 石見銀山城の歴史と景観—世界遺産と地域遺産—
- 9 和束地域の歴史と文化遺産
- 10 石清水門前寺院・南山城地域の古文書—京都府歴史資料の調査—



京都府立大学文化遺産叢書 第11集 舞鶴地域の文化遺産と活用

編集 東昇
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
発行日 2016年3月30日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2